

# 全国邪馬台国連絡協議会会報

# 邪馬台国新聞

発行所 全国邪馬台国連絡協議会事務局  
 発行者 鷲崎弘朋  
 〒105-0013 東京都港区浜松町2丁目2番15号  
 浜松町ダイヤビル2F

Tel. 090-3218-8622  
 URL <http://www.zenyamaren.org/>  
 E-mail [info@zenyamaren.org](mailto:info@zenyamaren.org)

## 会報 『邪馬台国新聞』

### 第5号の発行によせて

会長 鷲崎 弘朋

発足から三年が経過した当会は、この四月末で個人正会員三〇〇名(発足時七十五名)、十九団体会員

(所属約一八、〇〇〇名、特別顧問二十五名、また全国組織として四支部体制(東京、近畿東海、中四国、九州)を展開し、ほぼ順調に発展してまいりました。昨二十八年度は鳥取県米子市での第三回全国大会(十月)、各地区大会や会員研究発表会、地区講演会など大会を十回開催しました。また、新しい試みとして第一回「討論型研究発表会」をこの三月に開催し、今後二ヶ月毎に実施して行きます。これは、邪馬台国・古代史解明のため、魏志倭人伝に焦点を絞った論点について複数会員が発表したあと、発表者同士が討論すると共に会場参加者も加わり議論を深め解明に一步でも近づけようとの趣旨です。

また、ホームページ(H.P.) 上での発表(私の邪馬台国論・古代史論)二〇、〇〇〇字以内の原稿)は既に六十四論文が掲載されています。ビデオ映像は①「全国大会・地区大会」を会員限定でメルマガにて配信し、②「会員研究発表会」はYouTubeにて一般公開しております。H.P.の掲示板「会員交流広場」では会員同士の討論・意見交換が行われています。会報「邪馬台国新聞」は内容が充実し好評ですが、編集負荷が大きいため、当面は年二回発行を続けます。

平成二十九年度の大会等は、第五回研究発表会(四月)、第五回東京大会(五月)、熊本県菊池川流域

古代サミット(五月)、第2回討論型研究発表会(五月)、第六回九州地区大会(六月)、第三回討論型研究発表会(七月)、第二回東京地区講演会(七月)、第四回全国大会(十一月、関西で開催)などを予定しております。これらの詳細はH.P.またメルマガにてご確認ください。

第四回年次総会は六月十一日(日)午後、東京港区「三田いきいきプラザ」で開催します。今年の年次総会は役員任期(二年)の途中の為、大きな人事はありませんが、監事が現在一人ですのでこれを二人体制に強化したいと考えております。

法人化(NPOまたは一般社団法人)は、財政面でまだ弱いことと実務面での体制が整っておらず、今年は残念ながら見送る方針です。ただ、法人化は引き続き追求します。その条件を満たすため、今年個人会員四〇〇名超えを目標とすると共に、会計と事務局の体制強化を行いたいと思っております。

当会の最終目標はあくまで邪馬台国と古代史の解明です。当会は特別顧問の先生方のご指導をいただきつつ、①邪馬台国と古代史解明②地域興し③全国ネットワークのトライアングルをベースに、主要テーマとして以下の四項目を追求してまいります—①邪馬台国論「魏志倭人伝など文献や考古学からの位置論・卑弥呼論」、②邪馬台国前後の歴史「邪馬台国前史」邪馬台



宝塚歌劇団花組「邪馬台国の風」公演  
 宝塚大劇場 2017年6月2日~7月10日  
 東京宝塚劇場 2017年7月28日~8月27日  
 詳細は宝塚歌劇団のホームページか「邪馬台国の風」で検索

国々ヤマト王権、③古代年代論「土器年代等の考古学年代論」「日本書紀や古事記等の紀年論」「科学的年代論」年輪年代・炭素十四年代・酸素同位体比率代等)、④民族のアイデンティティと古代史。

当会は自然科学を利用した「科学的手法による年代論」を解明の突破口と期待しております。2010年に纏向遺跡の大型建物跡から出土した「桃の種」二、七六九個の炭素十四年代の測定が進められており、近く測定結果が出ると期待していますが、出土から既に七年が経過しています。この「桃の種」の測定結果は場合によっては邪馬台国・古代史に大きな影響を与える可能性があります。当会としては、このような年代測定結果に注視すると共に、これら年代測定が促進されるように世論形成を含め尽力して行きたいと思っております。

『歌劇6月号』(6月5日発売)発行株式会社宝塚クリエイティブアーツ(定価760円)に鷲崎会長のインタビュー記事が掲載されます。

# 各支部活動報告

## 近畿・東海支部活動報告

近畿・東海支部支部長 井上 修一

全邪馬連関西支部で、第七回例会として、顧問の西川先生が勤務する「大阪府立狭山池博物館」を見学した。特別展として「河内の開発と渡来人」をやっている、西川先生が講演してくれるというので、有志で出掛けて行った。

狭山池は、現大阪狭山市の中央北寄りにある。河内平野の東一帯は、生駒の麓を北流する石川および大和川とその支流によって潤っているが、西側一帯は、この狭山池出現前は全くの荒野であったと想像される。この狭山池とそこから流れ出る東除川・西除川によって、ようやくこの地方は灌漑されたのである。1400年の時を経ても今だにこの水は、この辺り一帯の稲作・畑作に貢献している。その優れた景観は古くから知られ、大阪府の史跡・名勝に指定されており、現在はハイキングなどで賑わっている。この池の築造については、以下の文献に見えるような由来・経緯・伝承を持っているが、はっきりした事は不明である。狭山池は、「古事記」「日本書紀」にも登場する我が国最古の灌漑用の溜池(ダム)で、日本書紀、古事記には以下のような記事がある。

### 『日本書紀』崇神 天皇紀

六十二年秋七月乙卯朔丙辰、詔曰、農天下之大本也、民所恃以生也、今河内埴田水少、是以、其国百姓怠於農事、其多開池溝、以寬民業、冬十月、造依網池、十一月、苜坂池、反折池、一云、天皇居桑間宮、造之三池也

### 『古事記』垂仁天皇紀

次、印色入日子命者、作血沼池、又狭山池

しかし考古学的な見地から、ほぼ6世紀末から7世紀にかけて築造されたものではないかとされている。昭和63年から行われた、「平成の大改修」と呼ばれる大規模な改修工事が行

に伴う発掘調査により、7世紀前半に築造された日本最古のダム式溜池であることが確認された。堤の最古の盛土から出土した木材の年輪をしらべた結果、AD616年を示していたのである。即、築造年とは見なせないが、その後数年乃至数十年のうちに用いられたものと思われる。狭山池は、以来1400年間にわたり何度も改修工事が行われ、その記録が周辺民家の古文書に残されている。

始めてここを訪れた人もいて、「へーこんなデカイダムが古代にあったのかあ」とか、「信じられん、この石のデカさはどうや。どないして運んで来たんやろう」と感嘆しきり剥ぎ取った地層の大きさや、千年前の灌漑施設の巧みさに、皆んな驚くばかり。途中で、我々のためだけにやってくれた、西川先生の講演「河内の開発と渡来人」を聞く。PPを利用して解説は面白かった。その後特別展会場で西川先生の解説を聞いた。

元来河内地方は、古来から渡来人の色が濃厚だ。至るところに渡来人由来の遺蹟や地名がある。渡来人達の知識や技術が、初期大和朝廷の礎となった事は疑いがない。河内の開発にも大いにその力を発揮したのだろう。

悠々たる天壤と、稜々たる古今に思いを馳せながら、実に有意義な半日を過ごさせて貰った。最後に、西川先生にも同席して頂き、三国が丘の白木屋にて打ち上げ。ほろ酔い気分です路についた。皆さんお疲れ様でした。



## 中国・四国支部活動報告

中国・四国支部支部長 田中文也

取り組みの概況について

私の所属する「山陰古代史研究会」は、全国邪馬台国連絡協議会の設立前後から今日までの間、様々な取り組みを行ってまいりました。

第1は「古代史(邪馬台国)サミット」の開催です。鳥取・島根・岡山・大阪など、近県を中心に「畿内説・九州説・山陰説の3巴の論戦」をモットウに、都合6回の開催を行いました。ここ2年は歴史と全国邪馬台国連絡協議会の全国大会を開催し、山陰での古代史研究の普及活動に精力的に取り組みました。昨年の全国邪馬台国連絡協議会第3回全国大会では自然地理学の成瀬敏郎先生を迎えて、14万年前の旧石器の全国での出土の報告を受け、ゴッドハンド問題以来留まっていた日本の旧石器研究のリスタートを宣言しました。又、私は日本の古代史研究の3つの分野である記紀や風土記等の分野、魏志倭人伝の邪馬台国論争の分野、さらに史記以来書かれていた徐福の日本渡海の分野の3つの分野を総合的に一体的に研究する「古代史大統一理論」の提唱を行い、全ての学問分野の古代史研究家が、全国邪馬台国連絡協議会に結集する重要性を訴えました。

第2は様々な研究課題の整理と研究を深める活動を行ってきました。記紀神話に史実が含まれている可能性を探る「縄文海進」の調査研究では、地質学的調査活動や2つの出雲国造家に残されている絵図の発見、並びに地域の伝承の掘り起こしを行い、確かなエビデンスを蓄積しました。記紀神話で、これまで山陰地域以外と考えられてきた「木の国」と「天孫降臨」が、山陰地方である根拠を集めることが出来、地元の新聞連載も行いました。又、高天原の存在を証明する研究活動なども行い高天原サミットも開催しました。この他にも、山をセンと呼ぶ習慣のあるやまの調査分布や製鉄の神々の分

布調査など、歴史学と考古学に加え、自然科学と民俗羅した総合的な研究調査活動を行いました。加えてこの中で日本古代文明が世界初人類最古の文明であることも論証しました。

第3はこれらの活動の中で、古代史検証ツアーやフィールドワークや古代史講座後の卒業旅行等も開催し、地域の活性化や観光振興・地元経済の活性化につながる模索も行いました。米子市本の学校で開催した「古代史講座」終了後の卒業旅行には、最大で大型バス2台のツアーを行いました。地元新聞の日本海新聞連載後のツアーでは、大型バスのツアーを3回に分けて行いました。私の居住地の境港市では、7つの公民館全てで「古代史講座」を開催しました。その後、地元金融機関が主催で自治体関係者やツーリストも含めた「古代史検証ツアー」も開催できました。

第4はこれらの活動の中で、兵庫県・鳥取県・島根県・岡山県にまたがる地域の古代史研究の団体及び個人と連携が作られたことです。現在、この4つの県で連携している団体個人は15に上ります。これらの団体・個人とは、サミットや全国大会などにも参加をいただき、又協賛・援助をいただきました。さらに交流の為に現地にツアーで行ったり各種の取り組みを行い、資料や会報の提供も行うことができました。

二〇二〇年は、いよいよ日本書紀一三〇〇年を迎えます。現在当会は、日本書紀一三〇〇年をめざしてと題して、昨年一月より半年間の「古代史連続講座」を開催しています。この講座には、前述した連携する一五の団体より外部講師にも来ていただき、三〇名弱の申し込みで常時二〇名余の参加者で講座を進めることができました。講座終了後は検証ツアーの開催も予定しております。

この活動の中で、今後の取り組みとして「古代・神話ネットワーク」の設立を検討しています。連携する一五団体に呼び掛け当会を含めて一六の団体で、兵庫県・鳥取県・島根県・

岡山県にまたがるネットワークを構築して、常時研究の交流を進めていきたいと考えています。当会以外は、「邪馬台国」の研究は行っていないために、古代・神話をモチーフにして、なお且つ会則も無く、会費も徴収しない情報交流の組織として運営しながら、将来の発展を検討したいと展覧しています。

まだまだ、日本中には数多くの研究団体や個人がおられるハズです。これら全てを網羅し、研究データの集約を行えば、古代史の謎解きにきっと貢献できるでしょう。



出雲千家・万古の図



中古の図

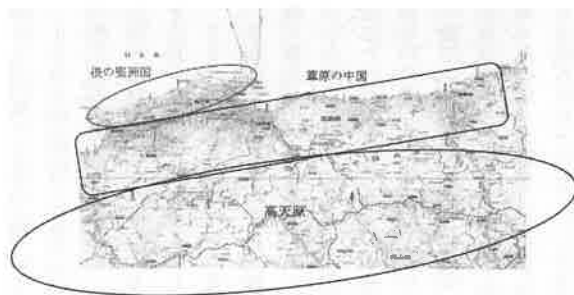


当古の図



縄文時代の日本列島

現在の日本列島



これが大八島ではないか

# 事務局からのお知らせ

## 事務所開設について

全国邪馬台国連絡協議会は、貸事務所会社と契約を結び、会長自宅から左記の住所に事務所に移転しました。現在の契約では郵便物の取り扱いだけの機能となっています。来訪は遠慮願います。今後は法人化にむけて登記を行い、電話その他の通信機能をそなえた事務所を目指していきたいと思っています。

## 新住所

105-0013 東京都港区浜松町二丁目2番15号  
浜松町ダイヤビル2F

# 会計局からのお知らせ

個人会員の会員期間を一律四月～翌年三月末までの一年間に統一します。個人会員の年会費は三千元とし、毎年四月に徴収となります。

年度途中での入会の場合の初年度会費は、左記のようになります。

- ① 四月～七月 三千元
- ② 八月～十一月 二千元
- ③ 十二月～三月 千円

この変更に伴い、現段階で入会している会員の方には、本年度に限り調整した金額の振込み用紙を同封させていただきます。

\*更新する翌年度からは、一律三千元の年会費となります。  
振込先

## ①郵便局振込みの場合

郵便振替口座 001401916000752

全国邪馬台国連絡協議会

## ②銀行振込みの場合

ゆうちょ銀行

〇一九店 当座預金口座 06000752

全国邪馬台国連絡協議会

問い合わせ先メールアドレス

zenyamaren@jcom.zaqne.jp

# 顧問投稿 (アイウエオ順)

今回は「私の年代論」をテーマ設定して投稿を御願いしました。

## 私の恩師② 長沼賢海さん

「人のやらない研究を」

元九州朝日放送キャスター 吉岐 一郎

2016年度ノーベル賞に輝いた大隅良典氏の快挙を知って、ぼくは喝采を叫んだ。はるか半世紀の昔、ぼくは大隅さんの祖父・長沼さんを太宰府のお宅に訪ねたことがあったからだ。福岡で初めて仕事をする事になり、北陸・金沢を共有する大先輩に九州の風土とあの戦争をどう理解するか聴きたいと考えてのこと。

長沼賢海さんは新潟・高田(現・上越市)の出身、20世紀の初め、全国に高等学校大学予科が7つしかない時代に金沢・四高を卒業、東大に進み、日本中世史の研究を志した。旧制中学の教諭や高等師範の教授をへて外遊、大正時代後期に九州帝大の法文学部創設で教授に就任した。

70代の長沼さんは50歳も年齢の違うぼくを親しく迎えてくださった。

「ぼくの頃は北陸線が全通していなかったの、直ぐの

港から石川県の七尾まで船で行ったのですよ」ということだった。1902年(明治35年)ころの話だ。笈を負うて和服姿で旅する若者の姿が浮かんだ。新潟・富山―能登の海がはるか西の玄界灘につながっている縁を思った。宗像族―安曇族と古来の「海族」の研究を察した。

1980年7月、97歳の天寿を全うされた。ぼくは葬儀に向かったが、仕事の都合で間に合わず、庭の芝生にお香の煙が漏れているのを見て、ひそかに拜んで帰社した。90年代になって在野の勉強家・黒田善光さんからあと1冊書いて死にたいとの意向で古事記と邪馬台国について1冊分書く力がないので、半分書いてくれないかという依頼があった。本の題は『邪馬台国筑紫広域説』(93年・葦書房)で、あとがきは2人で対談したが、なんと長沼さんが共通の恩師だと知ったのだ。大戦中、長沼さんは青年学級の講師養成の教授を委嘱されたという。いわゆる「国史」の教授だった。黒田さんは熱心な講師候補生、この時代、当局が教授内容に目を光らせていたと語った。この本は『毎日新聞グラフ』の邪馬台国本50冊にはいり黒田さんを喜ばせたが、惜しくも99年に他界した。

さて、長沼さんの著作は数多く『日本仏教史論攷』(私家版復刻2010年)『日本宗教史の研究』(28年・教育研究会)、『日本文化史の研究』(37年・同)などのほか、『日本の海賊』(至文堂55年)、『邪馬台と太宰府』(68年・太宰府天満宮文化研究所)と『日本海軍史研究』(78年・九州大学出版会)などは米寿以降の著作だ。氏の著作に実業学校用テキストがあることに注目したい。

\*

この程、国会図書館で長沼さんの『邪馬台と太宰府』のマイクロフィルムを通読した。ぼくが2011年、『継体天皇を疑う』(かもがわ出版・図書館協会選定図書)で6回も紹介している業績だ。

全文500頁の本題は「邪馬台日本の開国と大宰府の」となっており、上古編五章、上世の政経編六〜十一章、上世の文化編十二〜十五章、の構成となっている。

これらの論文で注目すべきは九州の出雲族、物部族と皇氏族大和入殖で学界近年の研究のさきがけともいえるだろう。さらに長沼氏の視野は広く「大宰府の商業府化」（八章）で遣唐使時代を鳥瞰したことを特記してよかる。この「商業」項目はほくに中国で近刊の『秦漢史』、「商人」項目を想起させた（2015年刊・中国大百科全書名家文庫・田余慶著。文化編が大宰府歌壇と仏教で、十四章が「日本初伝の仏教」だ。一節が「海外より見たる日本仏教」、二節「仏教の伝来」、三節「蘇我氏と仏教」で以下が大宰府周辺の井上寺・長安寺・武蔵寺が四〜六節で説かれている。この一、二節が重要で長沼史学の先駆的な役割と言える。すなわち、北魏の『洛陽伽藍記』の扶桑館、13世紀高麗僧・覚訓撰『海東高僧伝』

「釈摩羅陀伝」を引用し、「扶桑、文身、大漢国など明示」に注目すべきとした。さらに「仏教の始めて伝わるという扶桑国は日本とも受け取れる」とし「この史実は日本紀を補う貴重な史料とすべき」と強調した（311頁）。

中国正史史料で扶桑国の初出は『梁書』諸夷で唐代・姚思廉（代表）の編著だ。この中の「東夷」に前文と倭・文身国・大漢国、それに僧慧深証言の扶桑国・女国と記述された。が、日本学界の評価は低く、句読点付は太田亮『漢韓史籍に顕はれたる日韓古代史資料』（1928年初版・72年復刻・国書刊行会）、読み下し文は少なく、現代語訳は拙訳のみだ（初出『季刊 邪馬台国』7号1980年）。倭国は九州、文身国は北陸、大漢国は関東、扶桑国は関西、女国は東海とするのが小論で、「大」には大のほか「遠」があるとする。

拙著は『中国正史の古代日本記録』（葦書房・初版1984年）で松本清張氏への献辞を掲げている。また、『扶桑国は関西にあった』（同・葦書房1995年図書館協会選定）で

検証を重ねた。2005年、ぼくは5回目の洛陽訪問、扶桑館一址をほぼ特定できた。天津社会科学学院東北亜研究所、洛陽漢魏故城研究所、偃師市商城博物館の協力があった。

ぼくは福岡県に3回、のべ20年住み、邪馬台国問題で大学人の見解を調べたことがあるが、九州大学の考古学系は近畿説、文献系は九州説と大きく分かれていることを知った。考古学は京大系の影響が大だということだ。ぼくは九州説だが、3世紀倭列島の東西民度・民力の優劣を論じるのは早計だとしている。前3世紀、徐福集団の影響力など未解決問題が多いからだ。

\*

長沼さん令孫長男の大隅和雄氏は福岡市出身、中世史の専門家、広い視野で小沢昭一氏らの「日本の芸能」シリーズを執筆した（毎日出版文化賞特別賞）。ひ孫・清陽氏は古代史研究者で山梨大学勤務。「長沼精神」は受け継がれている。

年代学雑感

一 天文年代学 二 松學會大學名誉教授 大谷 光男

年代学という学問について、岩波書店刊の新村出編『広辞苑』（第六版・二〇〇八年一月刊）でみると、

文学・曆学などを利用し、歴史上の事実について、その正確な時日、相互間の時間的關係を定める学問とある。また、小学館刊の『日本国語大辞典』（第二版・二〇〇一年一〇月刊）には、

天文学・物理学・気象学・曆学・文献学などを利用して、歴史上の事実の年代や、時間的關係を決定する学問とある。

年代学とは一般に狭義の天文年代学を指すことが多いが、今日は物理学の範疇である炭素による年代測定法で、生物であったものであれば、上限があるが、現在からさかのぼって

計算できるという。

天文年代学の方では、一八八七年にオーストリア人オポルエル（Oppolzer, Th. Ritter von.）が日食・月食表（B. C. 1208 ~ A. D. 2163）、また一九一〇〜二〇年代にかけて、アメリカ人ノイゲバウエル（Neugebauer, P. V.）が惑星表を出版された。日食表は東亜に限って、渡辺敏夫氏が手を入れている。氏の『日本・朝鮮・中国の日食・月食宝典』（雄山閣・一九七九年刊）は広く膾炙され、また、斉藤国治氏は渡辺氏からノイゲバウエルの惑星表や年代学の蔵書を借用され、研究のすえに、小川清彦氏が星食記事検証（昭和初期）以後五〇年間も誰も顧みなかった惑星などの星の記録を生涯研究され、その成果は同じく雄山閣から『中国古代の天文記録の検証』（一九九二年九月刊）が主論文となっている。両書まさに日本の今日に至る天文年代学の白眉である。

斉藤氏は研究の成果をみて、天文年代を古天文学と改称することを、研究会（東京大学）で提案されたが、京都大学の齋内清氏は、まだ世界に通用しないのではないかと、反論されたが、著書に、論文に古生物学が認定されているのに、古天文学が認められないのは理解できないと公言し、これが効を奏し、公認されることになった。早速、氏は『古天文学の散歩道』（恒星社厚生閣・一九九二年二月刊）を出版された。なお、年代学には文献史学と結びついた考古年代学がある。出土した年代の文字のない考古学の対象となる物品を、年代的に分類する方法を説いた考古学者に、スウェーデン人のモンテリウス（Oskar Montelius）がゝる。

また、今日は産業考古学が誕生し、専ら産業に用いられる金属および、その製造した製品の寿命期間、品質の研究が主なる目的といえる。かつて、中国（漢代という）の皇帝が列侯に授けた金印（紫綬）の金の含有量を新日鉄株式会社研究所で調査して貰った際に、鑄造した品である以上、製造した年が分らないということは研究不足であると、将来の研究

目標の一つを告知された。なお、埼玉県行田市の稲荷山古墳出土の鉄剣の鉄は、中国産で、詳細は東京国立博物館報に載る。今後の日常生活に期待される分野である。

## 二 人文科学系の言語年代学

一般に自然科学部門の年代学は多少の見解の相違があっても理解できるが、人文科学的な年代学は、比較資料・文献が多岐にわたって存在するばあいは別として、編年体の『日本書紀』を研究するばあいは、推古朝までは『古事記』以外に断片的な金石文をもって検討する以外に道はない。学問は多数決で成果を決めるものでないので、研究対象の資料が少なければ、研究成果は断片的にならざるを得ない。例えば、今日で国家といえは、行政・立法・司法という三権分立の機能を有する国をいう。『日本書紀』巻七、景行天皇五十一年春正月戊子の条に「国家」を「アメノシタ」と仮名を振っているが(国史大系本)、本居宣長は「此天皇の御代などには、此称あるべからず」(『古事記伝』巻本二十八)という。「アメノシタ」が後に、「日下」(漢語・ひのした)と移ったのであるのか。日本の国を意味する語句にすぎない。

言語年代学がある。二系統の言語の分離年代を推定する。同系の単語は一定期間に変化する法則があるという。日本語と琉球語との分離年代の提唱は理解できるが、日本語と朝鮮語との関係は、文章の構造上から酷似しているが、音韻については日朝同祖論を、言語学者によつては否定されている。しかし、古代においては三韓から著しく文化の影響を受けているので、言語年代学の進展に期待したい。

## 三 『晋書・武帝紀』泰始二年十一月己卯の記事について(再考)

— 国立天文台の回答によつて —  
昨年十月発行の「邪馬台国新聞」第四号に右テーマ、

筆をしたが、この度、国立天文台から暦日の回答を頂いたので、稿を改めたい。問題は武帝泰始二年(二六六)十一月己卯の記事に、倭の使節の朝貢日が、二至(夏至・冬至)の祭典日に当たるのか、ということである。武帝本紀を再び掲げると、

泰始二年十一月己卯、倭人来献方物。并田丘・方丘於南北郊二至、之祀於二郊。

とあり、十一月己卯の日に倭国の使者が方物を献じ、同時に冬至の日でもあったので、二至を祀った、というように解釈できよう。問題はこの年の十一月己卯が冬至に当たるのか、国立天文台に晋が使用している景初暦での計算を願った。晋は前年の泰始元年十二月に、名称のみ改めて泰始暦としている。回答の結果は、泰始二年十一月乙亥朔、己卯は十一月五日、冬至は十一月十一日乙酉とのことである。

かような次第で、倭の使節は冬至を目指して武帝に朝貢したわけではなかった。冬至の祀りを繰り上げて催したことも否定できないが、現時点では調査不足である。

なお、三国志の『魏書』三少帝紀第四、陳留王紀の景元年(二六〇)の冬至についても計算を願ひ、十一月四日癸丑との回答を頂いた。先は国立天文台に厚く御礼を申し上げる。

## 四 むすび

以上、雑駁に年代学の一端について述べてみたが、研究の補助学として利用されることを期待している。天文・暦を対象とした年代学は最も正確に近い、利用価値の高いものである。この半世紀の間に、日本の多くの天文学者が、年代学に力を貸して下され、年代学の研究は恐らく、世界のトップクラスであろう。さらに先学を追って、実証できる記事を解明されることを後学に期待したい。

## 邪馬台国(女王国)の行方

大東文化大学名誉教授 小林 敏男

### (1)

邪馬台国の問題は、所在地論争が重要な課題であるが、さらに重要なのは、邪馬台国以後であろう。邪馬台国(女王国)では、卑弥呼(ヒミコ)が狗奴国との戦争の最中に亡くなり(二四八年頃か)、そのあと、男王を立てたが国中が服せず、千人以上の殺し合いが続いたのでヒミコの宗女奄与(イヨ)が王となって国中は治まった。このあと、イヨは、男王狗奴国との戦争の際に帯方郡から派遣されてきていた張政らの帰国に際して、倭の大夫掖邪狗(ヤク)ら二十人を、帯方郡を通して魏の都へ遣わしたとあって、魏志倭人伝は幕をおろしている。問題はこのイヨの魏への朝貢が何時かである。イヨの朝貢が魏王朝であるならば、魏の滅亡である二六五年までで、そのあと二二六年に晋にかわる。

周知のように、『書紀』神功皇后紀六十六年条には「是年、晋の武帝の泰初二年なり。晋の起居注に云はく『武帝の泰初二年七月、倭の女王、訳を重ねて貢獻せしむ』といふ」とある。この点は『晋書』武帝紀に「泰始二年十一月己卯、倭人來りて方物を献ず」とある。泰初は晋(西晋)の泰始であり、二六六年にあたる。この記事を先の魏志倭人伝のイヨの朝貢と対応させる説もあるが、それは別のものであって、即ち晋王朝への朝貢とみるべきであろうから先の魏志倭人伝の朝貢に対応させることはできない。問題は、張政の帯方郡への帰国(同時にイヨの朝貢)は何時であったか。張政がヒミコの邪馬台国(女王国)にきたのは、二四七年であり、狗奴国との戦争が開始された際、詔書と黄幢をもって難升米に授け、檄をもって告諭した。そして、その戦争の最中にヒミコが亡くなり、大きな墳墓をつくった。そのあとの混乱期を経て、イヨの即位になり、今度はイヨに檄を以つて告諭し、倭の大夫掖邪狗ら二十人の一行とともに帰国の途に着く。こ

うした一連の記事は、張政らの帯方郡への報告書をまわっているから確かなものであったろう。

張政の帰国は、狗奴国との戦争問題に解決がつかないが故の帰国でなく、ヒミコへの檄がイヨへの檄へとか変わったということ、一応の任務を果たしての帰国となつたのであらうとすれば、その滞在は二四七年から長くても数年とみておくべきであらう。佐伯有清氏①がいうようにこれを泰初二年(二六六年)の帰国とすると、十九年間も倭国に滞在していたことになり不自然さをまぬがれない。

『書紀』神功皇后紀にみる二六六年の晋への遣使が「倭女王」であるとしたら、それもまたイヨの遣使であったと考えられ、ヒミコの死、二四八年から十八年経っており、安定的な王権であったといえよう。従って一部でいわれているイヨの時代の東遷は文献史学の立場からは否定的である。もつとも狗奴国との戦争がどうなったかとの関連性もあるのですがまだ結論は遠い。

## (2)

邪馬台国(女王国)の行方は、次の畿内ヤマトの初期ヤマト政権との関係性ということになる。この初期ヤマト政権を論ずる確かな文献史料はない。そこで考古学の方から国家形成史が論じられているのである。いわゆる「前方後円墳の時代」である。三世紀中葉から四世紀中葉の間に畿内ヤマトを中心として全国に拡がっている前方後円墳体制ともいえるべきものである。問題は、国家形成史上、この前方後円墳体制をどう規定するかである。

A 連合・同盟説、B 地域政権(国家)説、C 分封制説、D 初期国家説に分けられよう。Aは、各地域の政治勢力(部族首長)がヤマトを中心として全国レベルで連合もしくは同盟を結んで全国的な秩序を形成しているという説、したがって、国家段階に達していない社会を考えている。Bは、各地域の

政治勢力(豪族、首長)が畿内のヤマト政権(国家)と「一つの政権もしくは国家を形成して(例えば、出雲政権、吉備政権、毛野政権、北九州政権等々、これを王国と表現する者もいる)併存して、その独自性・主体性をもっていたが、やがて中央のヤマト政権(国家)によって統一されたとする。これは複数の政権(国家)の併存をみとめる説である。Cは、各地の前方後円墳の大半は、封国の国造、王領の県主らが造営した墳墓である。すなわち王権による地方の征服―その征服地の支配者として派遣された將軍(国造、県主)たちがその土地で自分の墳墓をつくつたとする將軍分封制論である。これは古墳をすべて在地性のあるものとして固定してしまうのではなく、中央からのなんらかの力をみとめていこうとする点では興味深い。ある種の封建制的体制を想定している説である。Dは、具体的には前方後円墳国家論である。これは、この時代が未開末期の首長制同盟連合)の段階でなく、文明の国家段階にふみこんだことをみとめ、中央のヤマトの政治的統合力の強さを重視する見解である②。筆者もこの説に同意するが、これを「人的結合国家」として提示した③。それは、前方後円墳を築造した地方の有力首長らが、その政治的・経済的・交易的利害から中央のヤマト王権に求心的に結合し、大王との間に機構的ではなく、人的な支配隷属関係を形成したとみる。

## (3)

四世紀後半になると確かな時代を示す手がかりとして金石文がでてくる。金石文は同時代資料であるから編纂物に比べて確実な年代を示してくれる。

まず石上神宮の七支刀銘文がある。そこには東晋の太(泰和四年(三六九年)の年号が刻まれていた。この七支刀銘文は倭国と百済との軍事同盟を象徴するものとみなされている。さらに高句麗好太王碑文がある。これは辛卯年(三九一年)

に倭の勢力が朝鮮半島に侵入してきた事件を語るものとして有名である。問題の多い金石文であるが、初期日朝関係史のためには貴重である。辛卯年は三九一年が通説であるが、筆者はこれをもう六十年(一運)あげて、三三一年の辛卯とする。日朝関係の新しい展望が開けてくるものとして議論を展開したことがある④。この碑文には、倭国と高句麗との度重なる戦闘が四世紀後半から五世紀の初めにかけて記されている。四世紀後半になると倭国は積極的に朝鮮半島に介入するようになるのである。それは『書紀』神功皇后紀や応神天皇紀の中の「百濟紀」を素材とした記事によっても証明される。書紀編者は、百濟国で編纂された百濟記、百濟新撰、百濟本記のいわゆる百濟三書を素材にして、書紀の記事をつくりあげているので、信憑性の問題があるが、それらの記事が日朝関係史を語る記事として利用できる。さらに朝鮮側の史料として『三国史記』新羅本紀の中に倭兵、倭人が「新羅(斯盧)の海辺、都(金城)を襲撃した」とする多数の記事が四世紀を中心にして集中している⑤。これも必要な手続きをえると、史料として活用できる。

四世紀中葉から五世紀にかけては倭国(ヤマト政権)が朝鮮半島に交易を通じて、また政治的關係をもつて深くかかわってくる時代である。その際、朝鮮半島の南西部に倭人系勢力がいたということも考慮に入れる必要がある。大事なのは、『日本書紀』や『三国史記』の確実な考証であらう。

## (4)

『日本書紀』に関していえば、やはりその紀年の信憑性が問題となる。書紀の紀年は雄略天皇頃から朝鮮側の史料(『三国史記』)とも一致してくるが、それ以前は書紀紀年と中国・朝鮮史料との間にズレがあつて、よくいわれているのは『書紀』の神功皇后紀の中の朝鮮関係の記事は、百二十年(千支で二運)さげないと朝鮮側の史料に一致しないということ

ある。

応神天皇以前は長寿の天皇が多くあって、統治年数も長大化しているので、紀年はずいぶんと過去にさかのぼって延長されている。周知のように神武天皇の即位は紀元前六六〇年、辛酉におかれている。こうした書紀紀年を修正できるのは今のところ『古事記』の崩年千支であろう。十代崇神天皇の成寅年の崩御から始まって、推古天皇の戊子年までの十人の天皇の崩年が千支で記されている。この崩年千支については、その確実性を疑う研究者も多いのであるが、従って、これを堂々と使うにはまだまだ課題とすべきところが多い。なによりも崩年千支の研究業績が少ない。『書紀』の史料としての活用をすすめていく上でもこえなければならぬ高いハードルである。邪馬台国以後の国家形成史がなかなか進展しない(歴史像としてみえてこない)現状のなかで考古学の成果はめざましいものがあるが、文献史学による定年づくり(各天皇とその時代の確定)が欠かせない。

この点で少々おどろいたことであるが、最近一読をすすめられた興味深い論稿で、岸本直文「古市・百舌鳥古墳群の王陵の被葬者」(今尾文昭・高木博志編『世界遺産と天皇陵古墳を問う』所収、思文閣出版、二〇一七年)があるが、ここでは古事記の崩年千支を活用して五世紀代の王陵墓の編年をされている。

『書紀』の紀年問題、崩年千支などの年代論はこれからの課題であり、今この場での詳論の余裕はないので、ここではそうした課題をすすめていく上で重要な著書・論文を紹介しておきたい。

- (1) 那珂通世「上世紀考」『那珂通世遺書』所収、大正四年八月。
- (2) 三品彰英「紀年新考」(那珂通世・三品彰英『増補・上世紀考』所収、一九四八年)、同「日本書紀の紀年」(日本文化研究会編『神武天皇紀元論』所収、一九五八年)。

一九五八年。

(3) 丸山二郎「日本紀年論批判」一九四七年。

(4) 橋本増吉「改訂増補版・東洋史上より見たる日本上古史研究」第一編二三〜二六章、東洋文庫、一九五六年。

(5) 平田俊春「日本書紀の紀年」(『補訂版・日本古典の成立の研究』所収、一九五九年)、同「神功皇后紀と日本書紀の紀年」(神功皇后論文集刊行会編『神功皇后』所収、皇学館大学出版部、一九七二年)。

(6) 田中卓「古代天皇の系譜年代」(『田中卓著作集第2巻』所収、国書刊行会、一九八六年)、同「私の古代史像」(『田中卓著作集第十一巻のII』所収、一九九八年)。

(7) 安本美典「天皇の在位年数と寿命」(『大和朝廷の起源』、勉誠出版、二〇〇五年)。

(8) 小林敏男「日本古代国家形成史考」VII・VIII章、校倉書房、二〇〇六年。

(注記)

① 佐伯有清「魏志倭人伝を読む 下」吉川弘文館、二〇〇〇年。

② 拙稿「騎馬民族説と王朝交代論」(東アジアの古代文化を考える会編『今、騎馬民族説を見直す』所収、二〇一四年)。

③ 拙稿「日本古代国家形成史考」II・III章、校倉書房、二〇〇六年。

④ 拙稿「古代初期日朝関係史」とくに好太王碑文辛卯年条を中心として」(『日本古代国家の形成』所収、吉川弘文館、二〇〇七年)。

⑤ 佐伯有清『三国史記 倭人伝』を参照、岩波文庫本、一九八八年。

## 私の年代論

考古学を科学する会 主宰 藤盛 紀明

筆者は「考古学を科学する会(以後科学する会)」を主宰している。2017年4月19日に第72回が開催されたが、テーマは考古学における年代推定であった。「科学する会」の第1回(2003年)、第2回は年輪年代法、第3回、第4回は放射線炭素C14についてで、開催72回中21回、約3割が年代推定に関するテーマであった。「考古学と科学」に関する話題としては年代推定が最大の話題であることが証明されている。例えば墓室の築造年代が分かれば邪馬台国論争解決の糸口となるなど、市民歴史愛好家にとって実年代推定は最も興味あることである。筆者の専門の一つが非破壊検査なので「科学する会」では「測定」について繰り返し解説した。筆者の研究生生活現役時代には測定装置を自作していた。最近の研究者にとって装置は既製品を購入するものとなっており、使用する測定装置の性能・精度・保守に無頓着な人が多い。測定出来る範囲、測定精度、装置間のばらつき、測定値の信頼度、標準試験片、保守点検、測定環境、測定する対象物の状態の影響など多くのことをチェックする必要がある。研究論文には装置や測定時の条件を表示し他の研究者が再現実験出来るようにするのが研究者の常識である。しかしながら考古学における年代測定法の扱いは科学・技術の原則から外れていることが多い。

「科学する会」での放射性炭素C14最大の論者は新井宏氏、年輪年代法最大の論者は全邪馬連会長兼の鷲崎弘明氏であった。新井宏氏は『理系の視点からみた「考古学」の論争点』を著し、歴博発表のC14年代を厳しく批判した。鉛同位体分析結果から三角縁神獸鏡は魏鏡では無いと主張し、冶金考古学者としての地位を確立した。鷲崎弘明氏は日本考古学協会の研究会で年輪年代の問題について発表した。年輪年代法は一人の研究者の成果で他の人が検証できないことは致命



的である。筆者は鷲崎氏の主張する初期の標準曲線に「A」ありAD640年以前は100年古く推定しているとすると論に与するものである。

放射線炭素C14のキャリブレーション曲線は一本の線ではなく、ばらつき・幅のあるものである。測定値と実年代推定曲線が1点で交差しない年代も存在する。我々古代史愛好家が最も期待する邪馬台国時代の年代の付近が推定困難な年代であることが問題である。C14の年代推定方では数10年単位の推定は不可能であろう。

考古学者にとって型式、様式、層位が最重要概念であると言われているが、その結果の編年は各自各様。地域による編年の相互調整も難題である。土器編年としては、寺澤薫氏の考え方(複数土器の併存関係を考慮)は論理的であると思っ

## 時間と暦の話し

日本家系図学会会長 宝賀 寿男

1

あまりにも当たり前のことだが、その辺から書き出すと、「歴史」は多くの人々が参加して起きた諸事件の様々な流れから構成されるから、その元となる個別の事件をそれぞれの確に具体的に把握する必要がある。ニュース報道や情報伝達のため、特定の事件の内容を具体的に伝えるため、いわゆる「5W1H」という事件報道の六要素が押さえられることが基本になる。それが、①いつ(時間)、②どこで(場所)、③誰が(人)、④何を、⑤どのように、行ったか、⑥その理由は何か、ということであり、犯罪事件なら、犯人と目される者や被害者を特定して、検察官がこれを起訴状に明確に記さねばならない。このとき、5W1Hに若干補強されて、⑦誰に対して(Whom)、⑧被害はどれほどか(How much)、

などの要素が加わるから、「8何の法則」とも言われろ

歴史関係の検討・議論にあっても、それが現実起きたものならば、当然これら諸要素の的確な把握が必要になる。いわゆる「歴史の謎」とされてきた問題については、残念なこと、こうした基本的な諸要素の理解・把握が疑問なものが多々ある。学究が関与してもそうしたことが多い。これでは、「謎」が解決されるはずがない。

上記の諸要素のなかでも特に重要なのが、時間・場所・人という三要素である。戦後のわが国古代史学の主流となった津田博士とその影響を強く受けた史学にあつては、総じて言くと、史料に書かれた記事について、あまりにも素朴な理解・対応の姿勢のもとで、とくに「時間・場所」を大きく誤解して把握する傾向にあつた。その結果、応神天皇ないし仁徳天皇より前の時期を記す『古事記』『日本書紀』(以下は「記紀」と総称)の記事は、史実ではなく、後世の記紀編者による造作だという判断をして切り捨ててきた傾向につながる。八世紀前半頃のわが国の史官や政治家は、自家・自氏に都合のよい歴史を後になって勝手に造りあげたという見方(いわゆる「造作論」で、「反映説」にもつながる)である。これは、自らの「誤解」をならん認識せずに、「記紀」の編纂者・関与者(ひいては皇国史観)に記事の責任を転嫁させるものになさない。戦後も長くなって七十年余も経ち、様々な学問や科学技術も進歩したのだから、もっと冷静で合理的な歴史研究が求められる時期に来ている。

場所などの地理概念について簡単に触れておくと、例えば、記紀に「日向」「出雲」「熊襲」と書かれたら、それが即、八世紀代以降の日向国、出雲国として捉え、熊襲を「球磨十贈喚」とみて(そもそも、こんな地理把握が当時あったのか)、これが肥後南部以南の南九州に原住の民による勢力集団とみるような見方は、極めて非科学的だということである。これは、記紀編纂期の頃の一般的な地理概念としても、記紀の元

になる史料が書かれた時期でも同様な地理概念だったのかという問題である。

地名は変遷、移動することがままたあり、具体的な地理概念も時代に応じて変化する。同じような地名はあちこちにならりある。だから、多くの資料にあたり、個別に具体的な事件や活動をもとに総合的に把握しようとする場合には、誤解は往々にして生ずる。要は、視野狭窄で思込み・予断の大きい姿勢では、誤解に導かれることが多い可能性があるということである。先にあげた地名について言うと、後の日向国は、『書紀』にですら景行天皇の九州巡狩のときに命名されたと思われるくらいだから、そして、韓国に向かい合うという位置にもないから、遙か以前の事件の舞台となる「日向」とは、北九州の筑前海岸部になければならない。「出雲」を治めた大己貴命、大國主命には混同されがちな複数の者があり、高天原勢力に対峙した「出雲」の現実の地とは、「葦原中国」たる福岡平野の那珂川下流域であつた。天降りまでの高天原神話は、現実の出雲国を舞台とする『出雲国風土記』にはいっさい出てこない。奈良時代人の認識が史実原型から大きく変わっている例はかなりある。ここでは触れないが、人についての「異人同名、同名異人」(「人」は「神」でもある)の問題がある。

「熊襲」について、様々な習俗やトーテムズムの異なる「隼人」と同一視する見方は疑問であり、記紀や風土記などの各種記事から総合的・具体的に考えると、「熊襲」とは北九州にあつた邪馬台国関係者の残滓勢力というのが実態である(こうした指摘もいくつもある)。記紀の記事を簡単に否定するものだから、『書紀』ですら崇神天皇の版図のなかに入っていない九州までを含めた畿内と一元的な古代国家の存在を日本列島に考えて、それが朝鮮半島・中国本土と通交するという「邪馬台国畿内説」が大手を振って唱えられる。

津田亜流史学の視野狭窄性を先に触れたが、生身の人間が

天上から降りてくることは不合理である。だから、「天孫降臨」はありえないことであり、非科学的な造作だとみることにもつながるが、当然、記紀編纂時の人々だって、人間が物理的に空から降ってくると思っただけはなかなかる。古くから、そのように伝えてきていたと記しただけのことである。視野を朝鮮半島から北東アジアまで広げれば、上古諸国の始祖王の天上からの降臨伝承は多くある。そして、これらのいずれもが自然界の空そのものから先祖が来たのではなく、太陽神信仰や鳥トーテムズムなどもあって、むしろ先祖の居た地を「天上」とか「天」と表現しただけの話である。視野・思考の範囲を狭く考えて、自分の理解が及ばないものを切り捨てることの危険性がよく分かる。

## 2

さて、本題の時間について述べると、戦後の古代史学では、応神天皇より前の諸天皇については、異常に長い享年、治世時期の記事がもとで、非合理なことだと切り捨てられてきた。これは、記紀に記された紀年記事を「現在の暦」と同じものだと早合点して下した判断にすぎない。中国の例にかざらず、暦・年号と度量衡の方法は治世権者の権限とされて、地域と時代により多くの基準が様々にあった。月・太陽の動きや季節変化が基において造られるとはいえず、日本列島において、上古からのいつの時代でも同じ暦が使われたという保証はない。やや意味が不明であるが、邪馬台国の時代に倭地には春秋で年を数えるという記事があり、現実に雄略天皇の時代頃の記事からは、中国から伝えられた元嘉暦が使用されたことが確かめられる。それより前の『書紀』の記事が儀鳳暦（元嘉暦より後の暦法）に基づいて編纂されたのではないかとみられているが、当時の日本列島に原始的な暦法がまったくなかったとも言い切れない。記紀に見える伝承から見ても、「二倍年暦」など倍数年暦法による年齢表示では、

とみられる記事もある。

古代の中国各地や朝鮮半島を含む北東アジア地域の動きを見ても、様々な暦法があった。平勢隆郎氏の著『中国古代紀年の研究』などを見れば、中国の戦国時代には雄国それぞれに一年の始まりすら相当に異なる暦が使われたと分かる。だから、時代・地域を通じて一つの暦法のみを考えるのはたいへん無理なことである。高句麗では、中国の古い暦法である「センギョク暦」が使われたとの説（友田吉之助氏など）があり、これは、中国の干支紀年法と比べ総じて一年の差があるとされるから、有名な好太王碑文の干支紀年を中国の干支紀年法に基づくと安易に比定することは問題が大きい。

戦後の古代史学界では、記紀の紀年が現在の暦と同様に考える場合には、過剰な年代遡上になるとみられてきており、この見方自体は問題がない。だけれど、これが、後世に勝手に造作された根拠のない数字かという点、神武天皇の即位時期を遡らせるなどの目的に基づく編者の造作と考えるよりも、むしろ異なる暦法による紀年表示だとみたほうが自然である。『書紀』等の年代を七世紀代頃で考えてみると、同じ事件を記すものでも、一年ないし二年ほどの差異でほぼ同様に重複して現れるものがある。聖徳太子の生没年、阿倍引田臣比羅夫の蝦夷遠征や白村江戦の年代などがそうであり、このころでも複数の暦・紀年法が中央の朝廷内でも並立していたらしいと窺わせる。だから、年記記事については、予断をもつて安易に考えないことが重要である。

日本列島古来の暦法が、帰納的に考えて、例えば二倍年暦とか四倍年暦とかいう暦年法ではないかともみられている。

これは、貝田禎造氏が『古代天皇長寿の謎』などで説かれるが（帰納的に算出されるから、基本的な考え方はほぼ妥当と考えられるが、彼の年代計算値がそのまま妥当ということではない）、「二倍年暦」の存在を認める研究者は少しだがおられる。とはいえ、古代史学界のいわゆる学究たちは、

的根拠がないとして、こうした倍数年暦法の存在を認める姿勢がまるで見られない。

しかし、「自然界のなかの生物」として人間を考えれば、現代では寿命がかなり長くなってきたとはいえず、古代では総じて四、五十代で人々が死去した傾向がある。それを遙かに越える長大な享年をもつ者については、他の資料から実在性が認められたほうが自然な場合には、年暦のなんらかの倍数法で紀年や年齢の表示がなされていたと受けとらざるをえない。その場合にありうるのが、上古では原始暦の一つで四倍年暦もあつたが、それが二倍年暦に次第に変わり、更にいまの一年は一年という紀年法にかわってきたとみることであり、これが論理的に無理がない。今となっては年代探索が不可能だとか、安易に造作だと決めつけるのではなく、現存する様々な資料から総合的に原型の紀年を探るほうが有意義である。

## 3

上古史の年代・暦の検討に際して、端的に言いたいのは次の点である。

日本の史料では、雄略天皇治世期頃より前の時期では、紀年が長く伸びているが（二倍年暦及び四倍年暦の使用が記事にあることを示唆する）、十二世紀中葉頃に成立の朝鮮半島の歴史書について紀年が長く伸びていること（同様に倍数年暦の使用を示唆）をまったく無視する検討が、日本及び韓国・中国でもきわめて多い。高句麗では数十年程度の年代遡上だが（ただし、センギョク暦の使用を考慮のこと）、百済及び新羅では始祖王について、それが一、二百年ほどにもなる。

各種の史料の記事は、事件発生時の認識、次に当該史料成立時の編纂者の認識、という二重のフィルターで覆われている。だから、記紀成立時の認識についての把握が正しくとも、それが、史実原型の把握にほど遠いことがある。このことは、紀年はもちろん場所・人名（神名）などすべてに当

てはまることなのだから、上記の六ないし八の要素に「  
て、十分な資料検討につとめなければならない。これをいっ  
も強く認識する次第である。

全体を鳥の目で見ると技術を

邪馬台国の会 主宰 安本 美典

1

さいきん、囲碁や将棋の世界で、人工知能(AI、Artificial Intelligence)の力が、一流棋士の  
力に追いつき、追いこしはじめている。

碁の世界では、二〇一七年三月二十三日のワールド碁チャンピオンシップで、井山裕太六冠が、DeepZenGoに敗れている。また、世界タイトル優勝回数第2位で、現在、世界最強の棋士の一人とみられている韓国の李世石九段は、イギリスのグーグル・ディープマインド社のアルファ碁に、一勝四敗で敗れている。

将棋の世界でも、二〇一七年の四月一日に、将棋電王戦第一局で、佐藤天彦名人が、PONANZAに敗れた。

私は、「邪馬台国問題」や「日本語の起源問題」などの、日本古代史上の大問題なども、確率論や統計学、そしてコンピュータなどの力をかりて、まったく機械的に解決をみる可能性が大きいと考えている。

私は、そのような方向へのころみとして、邪馬台国問題では、『邪馬台国は、99.9%福岡県にあった』(勉誠出版、二〇一五年刊)を出した。これは、ベイズの統計学によって、邪馬台国が、福岡県にあった確率や、奈良県にあった確率などを計算したものである。東京大学名誉教授の統計学者で、わが国におけるベイズ統計学者(ベイジアン)の第一人者ともいえる松原望氏と、長時間の検討を行なったモデルにもとづく計算である。

日本語の起源問題では、『研究史 日本語の起源』(勉誠出

版、二〇〇九年刊)や、『日本語の誕生』(大修館書店、一九九〇年刊)などを出した。これらは、日本語と、日本の周辺の言語、四十八言語との近さの度合を、基礎語彙などにもとづいて計算したものである。基本的には、フィッシャー流の統計学により、日本語と偶然以上の一致(有意の一致)を示すものは、どのような言語であるかを、計算して、とりだす方法による。大量の計算はコンピュータの利用なしには不可能である。

統計学や確率論、そしてコンピュータの利用などにもとづく情報処理の技術は、すでに、これらの諸問題解決に必要な技術や方法については、提供しているとみられる。

あとは、おもに、さらに多くのデータを入力し、解の精度を高めることであるとみられる。

邪馬台国問題も、日本語の起源問題も、問題を数量化して考えるべき膨大なデータが存在している。

求められるのは、多量のデータを系統的に整理し、全体像を、正確に推論する技術の確立である。

土や石や木などの素材について、一つ一つ正確に記述するだけでは、建造物にはならない。それらを整理し、組み合わせ、組み立てなければ、建造物にはならない。

邪馬台国問題や日本語の起源問題についての混乱は、そのような建造技術、正確な推論によって、全体像を浮びあがらせる技術への無理解や無関心から来ているように思える。私たちのとった方法や結論が正しいかどうかは別として、方向としては、こちらに進むべきではないのか。

共産中国の建設者、毛沢東は、かつてのべた。「揚子江は、あるところでは北に流れ、あるところでは南に流れ、あるところでは西にすら流れている。しかし、大きくみると、かならず西から東へ流れている。」

部分にとらわれず、データの全体を、鳥の目になって、大きく俯瞰するために、統計学やコンピュータによる情報処

理の技術が必要なのである。  
すでに、道具は用意されている。

2

かつて、統計学は、人口を数えるとか、米の収穫量を数えるとか、製品の数や販売量を数えるとか、もっぱら「物質」を数え、分析するものであった。

いま、統計学は、「言葉」を数えるとか、パソコンでの検索数を数えるとか、スポーツや、碁や将棋などのゲームの「勝率」を数えるとか、あるいは、株の値動きを見るとか、「情報」を数え、分析することに、かなりな比重がうつっている。

「物」の時代から、「情報」の時代へ。  
それとともに、統計学自体も、さまざまな形で発展をとげるようになった。

むしろ、「情報分析学」が成立し、統計学や、確率論や、コンピュータ技術などは、「情報分析学」を支える技術となりつつある。

かつて、帝国主義の時代に、西欧列強は、後進の諸民族や国家を支配し、植民地をつくり、強大な国家をつくらうとした。それになぞられていえば、いま、「情報分析学」は、従来「人文科学」とよばれてきた「文学」「言語学」「歴史学」などの諸分野などに進出し、学問や科学上の、情報学帝国主義の戦いをくりひろげているようにみえる。

情報分析のエキスパート、専門家が必要とされる段階に到っている。

なにかの記事で、公安調査庁などの行なう国家間の情報収集・分析活動において、収集と分析とは分離し、同じ人がやらないようにする、という原則がある、というのを読んだことがある。

情報を収集した人が分析をすると、苦勞して取った情報ほ

ど、高く評価してしまい、判断に偏りを生ずる可能性がある、というのである。

また、みずからの立場や価値観があると、みずからに都合のよい情報を偏愛してしまう。そのため、情報収集・分析活動にもとづく政策の立案や執行において、判断を誤る可能性がある。

情報分析学の分野においても、データの収集と分析とは、わけた方がよいのかもしれない。できるだけ、第三者的な立場から、情報の客観的分析をする方法を講じないと、事の判断を誤る。

このようなことから、情報分析学の専門家の育成がごまれる。

## 私の年代論

元國學院大學教授 柳田 康雄

弥生時代の年代は、紀元前四〇〇年頃から紀元二〇〇年頃までと考えている(柳田一九八二a・b・一九八二・二〇〇二b・二〇〇四・二〇〇九a・二〇一四)。弥生時代の始まりの年代は諸説あるが、国立歴史民俗博物館が提唱した五〇〇年さかのぼるといふ説や日見の説には賛同できない。

弥生時代のはじまりは、弥生早期文化の構成要素を分析すれば明らかとなる。弥生早期は、朝鮮半島南部の無文土器時代のうち青銅器時代編年1期に当たる休岩里式土器に対応する(武末二〇〇四)ことから、稲作・基盤式支石墓・木棺墓・青銅武器模倣石器・大陸系磨製石器などが共存している。このうち支石墓や木棺墓に副葬されている青銅武器模倣磨製石剣は、遼寧式銅剣を模倣した有段柄式磨製石剣ではなく、中国式銅剣を模倣した有節柄式磨製石剣と無段柄式磨製石剣である。有節柄式中国式銅剣の時間的上限は紀元前五〇〇年前後であり、中国東北部の遼寧省では戦国時代晩期に普及する。この時期遼寧省や朝鮮半島ではその模倣銅剣も製作される。

それに先立ち朝鮮半島では有節柄式銅剣模倣磨製石剣が製作され普及する。すなわち、この有節柄式磨製石剣が弥生早期に朝鮮無文土器丹塗磨研小型壺と共に玄界灘沿岸に最初に普及するのである(柳田一九八二a・一九八三・二〇〇二b・二〇〇四・二〇〇九a・二〇一四)。ちなみに、近畿地方の第1様式第1段階は、壺の肩などに突帯をめぐらすものがあることから、玄界灘沿岸の前期末〜中期初頭に併行するものと考えている(柳田二〇〇四・二〇一四・二〇一五c)。

弥生中期は、やはり朝鮮半島系青銅武器と無文土器文化の影響を強く受けて始まる。弥生前期末と言われていた福岡市諸岡遺跡の円形粘土帯土器は、板付系壺から脱した湾曲口縁壺を共伴することから、弥生中期初頭と考えている(柳田二〇一五c)。この時期中国では前漢王朝が起り、周辺諸国がその影響を強く受けている。円形粘土帯土器をもった朝鮮系渡来人には朝鮮半島系青銅武器工人も加わり、倭系に改良された青銅武器を出現させている(柳田二〇〇四・二〇〇九b・二〇一四)。

弥生中期と後期の境は、甕棺墓の主要副葬品である漢鏡で明瞭に区分できる。三雲南小路王墓(柳田編一九八五)や須玖岡本王墓には前漢末(漢鏡3期)の異体字銘帯鏡、後期初頭以後の甕棺墓には漢鏡4期の異体字銘帯鏡が副葬されている。したがって、弥生中期と後期の境は紀元前後となる(柳田一九八二a・一九八三・一九八五・二〇〇〇b・二〇〇二b)。

弥生後期になると漢鏡はイト国に集中して分布するようになる。前漢鏡はイト国の三雲南小路王墓が五七面、ナ国の須玖岡本王墓が三〇面ほどを持っていたが、後漢鏡になるとイト国では井原窪溝王墓(二一面)と平原王墓(四〇面)だけではなく、井原ヤリミン墳墓群では破砕鏡一面を供献する木棺墓がすでに五基発見されているように、イト国に集中している(柳田二〇一五a・b・二〇一六a・b)。したがって、『漢委奴國王』の金印は、イト国王に下賜されたものといえる。

ている(柳田二〇〇三・二〇一〇・二〇一三・二〇一五a・二〇一六a・b)。

弥生時代の終わりは、やはり墳墓に副葬された漢鏡の年代で決定できる。私は、古くから弥生終末とされてきた西新町式土器ではなく、その直前の土器様式を弥生終末としている。例えば、三雲遺跡寺口石棺墓は、後漢末の蝙蝠座内行花文鏡・鉄剣・玉類をもち、周溝では拙稿の弥生終末土器セットがほぼ完形品で出土している(柳田一九八七)。

近畿地方中央部(大阪・奈良県)では、いまだに弥生終末までに漢鏡の破片すら出土しない。岡村秀典(一九九九)の漢鏡の分布図では、漢鏡4期以後近畿に分布するようになっているが、これらは伝世して早期古墳(庄内式)以後に副葬されるのであり、弥生時代から当該地に分布するものではなく、東漸した北部九州人が持ち込んだものである(柳田二〇一〇・二〇一三・二〇一五a・b・二〇一六a・b)。

北部九州に漢鏡の分布の中心がなくなるのは、漢鏡7期第2段階の画文帯神鏡からである(岡村一九九九)。岡村説は文様論であり、私のような製作技術・使用痕跡論(柳田二〇〇二a・二〇〇九b・二〇一五a・b)ではないことから、糸島市平原王墓(柳田二〇〇〇a・b・二〇〇二a・b)の四〇面の銅鏡を漢鏡4期と5期に位置付けるが、拙稿では漢鏡7期第1段階併行期に置く(柳田一九八七・二〇〇〇a・b・二〇一〇・二〇一三・二〇一五a・b・二〇一六a・b)。

## 参考文献

岡村秀典 一九九九『三角縁神鏡の時代』吉川弘文館  
武末純一 二〇〇四『弥生時代前半期の暦年代―北部九州と朝鮮半島南部の併行関係から考える―』福岡大学考古学論集―小田富士雄先生退職記念―

柳田康雄 一九八二 a 「原始」「甘木市史」甘木市  
 柳田康雄 一九八二 b 「三・四世紀の土器と鏡」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』

柳田康雄 一九八三「伊都国の考古学―対外交渉のはじまり―」『九州歴史資料館開館十周年記念大宰府古文化論叢』  
 吉川弘文館

柳田康雄編 一九八五「三雲遺跡」南小路地区編『福岡県文化財調査報告書』六九

柳田康雄 一九八七「九州地方の弥生土器―高三瀨式と西新町式土器―」『弥生文化の研究4弥生土器II』雄山閣

柳田康雄 一九九五「弥生の諸形式とその時代への疑問」『東アジアの古代文化』九二 大和書房

柳田康雄 一九九八「伊都国の繁栄」『西日本文化』345・346 西日本文化協会

柳田康雄・角浩行編 二〇〇〇 a 「平原遺跡」『前原市文化財調査報告書』七〇

柳田康雄 二〇〇〇 b 「伊都国を掘る」大和書房

柳田康雄 二〇〇二 a 「摩滅鏡と踏返し鏡」『九州歴史資料館研究論集』二七

柳田康雄 二〇〇二 b 「九州弥生文化の研究」学生社

柳田康雄 二〇〇三「イト国」王墓と初期ヤマト王権の出現」石野博信編『初期古墳と大和の考古学』学生社

柳田康雄 二〇〇四「日本・朝鮮半島の中国式銅剣と実年代論」『九州歴史資料館研究論集』二九

柳田康雄 二〇〇五「青銅武器型式分類序論」『國學院大學考古学資料館紀要』二一

柳田康雄 二〇〇九 a 「中国式銅剣と磨製石剣」『國學院大學大学院紀要―文学研究科―』四〇

柳田康雄 二〇〇九 b 「弥生時代青銅器土製鋳型研究序論」『國學院雑誌』一一〇―一六

柳田康雄 二〇一〇「弥生王権の東漸」『日本基層文化論叢』

楳山林継先生古稀記念論集』雄山閣

柳田康雄 二〇一三「弥生時代王権論」柳田康雄編著『弥生時代政治社会構造論』雄山閣

柳田康雄 二〇一四「日本・朝鮮半島の青銅武器研究」雄山閣

柳田康雄 二〇一五 a 「伊都国王墓が語るわが国の誕生―伊都国女王の出現と平原巫女王墓の存在意義―」『伊都国フォーラム』伊都国から日本の古代を考える」伊都国女王と卑呼―王権誕生の軌跡を追う―』糸島市教育委員会

柳田康雄 二〇一五 b 「1・2世紀の摩滅鏡・踏み返し鏡・仿製鏡」『古文化談叢』七四

柳田康雄 二〇一五 c 「板付Ⅲ式土器と城ノ越Ⅲ式土器」『平成二十七年九州考古学会総会研究発表資料』

柳田康雄 二〇一六 a 「国家形成期における伊都国が果たした役割―銅鏡にまつわる風習はイト国からヤマトへ―」『第2回伊都国フォーラム倭国誕生―伊都国から邪馬台国へ―』糸島市教育委員会

柳田康雄 二〇一六 b 「弥生王権論―イト国からヤマト国へ―」『平原遺跡出土品国宝指定10周年記念事業伊都国歴史博物館秋季特別展 王の鏡―平原王墓とその時代―』

## 会員投稿

(アイウエオ順)

『神武東征物語』の輸入の元を見つけ！

―ネタバレだらっ！―

尾関 郁

日本書紀は中国大陸の文献の一部を取り込んでいると指摘されています。たとえば楚辞の海神宮訪問話から山幸彦の海神宮訪問話 史記の天皇と大夫から天皇と大夫三國志の卑呼から比売、日亮、天照大御神 旧唐書の高宗天皇大帝から天皇後漢書の考靈帝、皇太子から考靈天皇、皇太子 隋書の

阿每多利思比孤から多利思比売、足仲彦倭国の使者の来隋から小野妹子の派遣 その他などです。ここで重要な北史卷九十六の文を提示します。……神武遷都後始密国。乃偽許以女妻蠡升太子。蠡升遂遣子詣都。齊神武厚禮之。緩以婚期。蠡升既特和親。不為之備。大統元年三月。齊神武襲之。蠡升率輕騎出外徵兵。為其北部王所殺。送於神武。其衆復立蠡升第三子南海王為主。神武之滅。獲其偽主。及弟西海王。并王后婦人王公以下四百余人歸於都。河西者多特陰不實。時周文方與神武爭衝。

この文は齊の国の神武なる者が建都に移った後、蠡升(らしょう)の子供を欲待して蠡升到安心させて備えをさせないで、大統元年に襲撃して滅ぼし、偽の主人に成り替ったということです。

これってイワレヒコが八咫鳥を使った策略でナガスネヒコ一派を滅ぼし、樞原・明日香地域の主人となる日本書紀の神武東征物語に似てますよネ。つまりこの北史の文をネタにして神武東征物語を創作したと考えられませんか。作家はなにも大きな事件が起きなくても一つの言葉を手掛かりにして物語をどんどん創作しますが、これだけネタがあれば日本書紀にある物語を書くことは朝飯前でしょう。このことでも日本書紀の古代については文学作品と言えれば聞かえはよろしいが、率直に申せば捏造だらけでは……。私はそう判断します。あなた様はいかがか？

## わが図書を語る

『予言 大隅邪馬台国』2008年 牧歌舎(1000円)  
 『古日向邪馬台国』2016年 牧歌舎(700円)

河野 俊章

私は早くから「邪馬台国は大隅」(予言「大隅邪馬台国」)

の核論と確信していた。しかし自論が正しいと思いがちも、気になる点の一つあった。それは「魏志が書いている邪馬台国とは、大和朝廷の前身である(つまり天皇支配の国)」と言う事実である。古事記などは、昔の天皇国を「日向」としている。

一方、私が確信する邪馬台国は、お隣ではあるが、日向ではない「大隅」であることだ。この違いは、ごく最近まで私を悩ませた。

しかし最近目にした古書の中に「昔の日向は、現宮崎県と島嶼部を除く鹿児島県であった」という記事があった。

これですべてが明らかになった。古事記などに書かれている「日向」はもちろん「古い日向」のことで、大隅地方も日向であったのだ。(「古日向邪馬台国」の核論)



### 第四回会員研究発表大会概要報告

考古学会は百年新しく時代を間違えている。

石井 好

考古学会は纏向宮殿が卑弥呼の宮殿とか、箸墓は卑弥呼の墓という宣伝を盛んにしています、これは大嘘です。

その原因は、光谷氏の年輪年代法と歴博の炭素十四年代法の誤りがあるのです。彼等が言うように卑弥呼の死亡は二四八年としましょう。私は百く百十年時代を新しく間違...

ると考えています。

纏向宮殿・箸墓古墳の築造時期は三四八〜三五八年頃になります。日本書紀より、この時代は垂仁天皇の珠城宮、箸墓は倭モモノ姫の墓になります。この事を度々議論しています。歴博は反論を返してきません。歴博は箸墓古墳の周濠か須恵器が出土する事を知らないようです。須恵器が出土すると三八〇年頃になります。箸墓のような周濠を持つ大型古墳は鉄鋤・鉄鍬が必要になります。これ無では、大型古墳は作れません。また大型古墳を作るには人が増える必要があります。人が増えれば鉄鎌が必要になります。

纏向宮殿を作るには、鉄刀子、鉄ヤリガンナ、鉄鑿、鉄斧、鉄鋸が必要になります。二四八年頃の奈良県には、これ等の鉄製工具は一本も出土しないのです。考古学者は纏向宮殿を石斧で作ったと考えています。ほぞ穴・木鋸・木鋤等は石斧ではできません。鉄鑿・鉄刀子が必要なはずです。第一、古墳からは石斧等出土しません。古墳時代は鉄器の時代なので、石斧等古すぎて使い物にならないのです。考古学者は考古学の常識も無いようです。これ等の大量の鉄器が出土するのは四世紀中頃(三五〇年頃)になります。二四八年頃には奈良県には一本の鉄器も埋葬・出土していません。詳しくは、全国邪馬台国協議会の第四回会員研究発表会の二〇一六年十一月十三日のyoutubeで見る動画で見て下さい。

生殖医学の観点から古代史を探る

国際医療福祉大学教授／福岡山王病院部長／

モンゴル医療科学大学客員教授／医学博士

江本 精

生殖医学とは、「子を産む」ということに関わる全ての課題を探索する科学分野であり、「種の保存」という生命の重大命題を預かる領域である。この中には、不幸にも正常ではない過程や結末のものも含まれる。医学が未発達な古代、現代

代人が想像する以上の喜びと苦しみがあり、それが日本固有の宗教観の一部を形成していった。具体的には、神社の形態は子宮を中心とする妊娠した女性の生殖器を表している可能性がある。ご神体である鏡は胎盤をモチーフとして、勾玉は胎児を、しめ縄は(その緒(臍帯))をモデルとして作られたのではないかと。つまり、神社とは新しい生命が産まれる聖域であり、魂が再生される神域でもあると考えた。安産祈願や出産後のお宮参り、更に産まれた赤ちゃんの(その緒を一生大事に保存する風習は日本固有の文化である。女王が君臨した三世紀に出現した前方後円墳も子宮を模倣して築造したのではないかと私は考える。古代人が子宮の形を模倣して前方後円墳を造った理由は「再生」に対する強い願いであろう。

「亡骸を子宮に戻して再び胎児に帰れば、魂が再生する」という獨創性である。縄文時代に作られた土偶は、古代日本芸術の原点と言ってもよく、私は妊娠中毒症の妊婦をモチーフとしたものと考えている。また、日本神話の中で「イザナギとイザナミの最初の子は骨無しの水蛭子だったので、葦船に入れて流した」という説話は、蛭子が「胞状奇胎」であった可能性を示唆している。ヤマトタケル伝説においても、ヤマトタケルが双子の皇子であれば説明できるのではないかと私は考えている。日本の古代はまだ謎が多く、生殖医学の観点から古代を探ることは、今後の古代史研究や考古学の考察において新たな局面をもたらすかもしれない。私は、生殖医学と考古学の統合を目指すものとして、ここに「生殖考古学」という新たなテーマを掲げた。

『魏志倭人伝』を統一基準で読む

木本 博

邪馬台国論争は終息の気配を見せません。その理由は、魏志倭人伝が学者の恣意的な読み方で解釈されてきたからです。百人の学者がいれば、百通りの読み方があるといっても

過言ではありません。

漢字には上古音・中古音・漢音・呉音・唐音・慣用音など、色々な読み方(発音)がありますが、学者達は倭人伝をこれらの発音をチャンポンにして読んでいます。

倭人伝の固有名詞(国名・人名・官職名)は、当時の倭人の発音を中国人が最も近い発音の漢字で表記したものです。従って、中国人は何音で聞きとって記述したかを特定するために、固有名詞を呉音なら呉音で全部読んでみることで、その中に現代の地名などにつながるものがあれば、その発音で研究を進めればよいのです。結論を言うと、国名を漢音で読んだ時のみ、現代の地名につながるものが存在します。分かり易いのは倭国の「姐奴国」「躬臣国」と、倭種の国々の「侏儒国」です。それぞれ「シヤドコク」「キウウジンコク」「シユジュコク」となります。このままでは良く分かりませんが、実はこれらは筑後弁なのです。

筑後弁ではサシスセソをシャシシユシエシヨと拗音で発音します。従って、3つの国名から拗音(ㄷ)を抜いてみると、シヤド(syado)——サド(sado) Ⅱ佐渡 キウウジン(kyujin)——クジン(kujin) Ⅱ久慈 シユジュ(syuzyu)——ズズ(suzu) Ⅱ珠洲 となります。佐渡は新潟県の佐渡島、久慈は岩手県と茨城県にあり、珠洲は能登半島の先端・石川県珠洲市です。これは、北部九州(筑後)の邪馬台国から、全国に倭国のネットワークが広がっていたことを物語っています。

「水行十日陸行一月」の経路

金田 弘之

倭人伝は、倭国の地理を三つの視点(方位・日程・距離)から記述しますが、いずれも帯方郡から倭(女王)国を俯瞰しています。特に、①日程に記述される帯方郡く伊都国までの個別里程の合計(二万二千百里)と、距離に記述されてい

る女王(邪馬台)国までの里程(萬二千余里)との僅(差八百里)が伊都国く邪馬台国間の里程になる。②「水行十日陸行一月」は帯方郡く邪馬台国までの日程になる(従来説で、伊都国や投馬国を起点にすると、魏にとって最も重要な帯方郡から女王国までの日程が消えてしまいます)。の、二点に着目することが重要と考えます。

魏使者・派遣時、韓半島全域は、魏の秩序領域に編入され、経路は、帯方郡に集結・再編成された魏軍の倭国移動を前提にしたものと考えられます。

狗邪韓国く末盧国の里程換算値から、倭人伝は短里(一里 Ⅱ72.5m)を用いていたことが分かりますが、武装兵の歩幅(72.5cm)が基準とみられます。ちなみに狗邪韓国く対馬国間を千余里(72.5km)としていますが、一日で渡る水行の能力限界と考えられます。

ところで遼東の公孫氏攻略時、皇帝に所要日数を尋ねられた司馬懿は「往路に百日」と応えていますが、軍の移動は一日に約16〜17kmとみられます。

私見では、帯方郡から魏・勢力圏の牙山湾まで千五百里(約110km)水行(約3日)↓諸韓国に上陸して狗邪韓国まで五千五百里(約400km)陸行(約24日)↓更に狗邪韓国く末盧国まで三千七百里(約270km)水行(約7日)↓末盧国く邪馬台国まで千三百里(約90km)陸行(約6日)し、合計すると「水行十日陸行一月」に合致します。

「水行十日陸行一月」は、帯方郡から邪馬台国までの日程、移動対象は魏軍で、「諸韓国陸行」が中心を占めていたものと考えます。

史料を信じよう

菊地 昌美

昨年11月13日の、発表の要点を書かせて頂きます。1 後漢書東夷伝の重要性。

著者の范曄は、432年冬、宣城太守に左遷され、432年中に未完成の後漢書を世に出します。范曄の先輩に范曄と同じく歴史家にして政治家の裴松之がおり、裴松之は、宋の文帝から426年『三国志』の注を作るよう命じられ、当時あつたあらゆる史料を集め注を作り、429年文帝に献上し、「これは不朽となるであろう」というお褒めの言葉ももらいます。

裴松之の活躍は、范曄に影響を与え、范曄は裴松之以上の史料を集めようとしたのは当然と思われま。その一つが倭の五王のうちの讚と珍の朝貢から得た情報だと思えます。

2 魏志韓伝に「州胡有り、馬韓の西の海中の大島の上に在り」とあります。魏志の著者陳寿は大陸・半島を離れると、とたんに方角を誤り、馬韓のほぼ南にある済州島を西としております。このことから、方角は時計周りから90度引いて、南は東、東は北、北は西になります。

3 方角の訂正と、後漢書東夷伝の「倭の奴国……倭国の極南界なり」の記述から、魏志倭人伝の「奴国……南投馬国……南邪馬台国……南狗奴国」の南は東になります。また『後漢書東夷伝』で「女王國より東度海千餘里拘奴國に至る」と南を東に訂正しています。

4 『後漢書東夷伝』に「自女王国東度海千余里至狗奴国……自女王国南四千余里至朱儒国、自朱儒国東南行船一年至裸国、黒齒国」とあり、狗奴国の後は伝説の朱儒国・裸国、黒齒国となりますから、狗奴国は倭国の東の端になり、関東の犬吠崎を東端とする国となると思います。なお朱儒国はフロレス原人、裸国はニューギニアの裸族、黒齒国は檳榔椰子で齒を黒くしている台湾住民のことだと思えます。

## 第五回会員研究発表大会概要報告

### 『4世紀の紀年論』

米田 喜彦

多遲摩氏の系図が、矛盾を抱えながらそれなりに正しいとすると、どんな世界が見えてくるかを、垂仁天皇の在位99年を目安に、系図解説から、挑戦してみました。

一番目の仮説は、「同名でも、別人で夫婦である。」を、考えました。検証には『百済本紀』の「昆支王」の系図と、仁賢天皇紀の「アラキ・アクタメ」の系図を使いました。『4世紀』の解説復元の方法としては、系図解説の外に、シンメトリック論も使いました。仮説は「干支を重視して、天皇紀を60年ずつ誤魔化している。」を、考えました。これによって、各天皇の即位年を基準年として、日本書紀の記事の年代を特定復元することが出来ました。『4世紀』の解説復元の方法の三番目は、史料に書かれている干支を利用しました。『風土記』孝靈天皇(伊賀国)、垂仁天皇(陸奥国)、応神天皇(伊豆国)を、「勘注系図」などから崇神天皇を、「三国史記と日本書紀」の記述から、仲哀天皇の即位を推定しました。

これらの作業から、4世紀の「系図と年表」を、作る事が出来ました。「系図」・「年表」・「シンメトリック論」等は、当日配布の小冊子で公表しました。「4世紀の系図」の復元と「4世紀の年表」を作るところまでは、私ひとりで行いました。ここから先は、バグ取りと検証、「系図・年表」の解釈の作業が、始まると思います。「女系」で並んでいる皇后とか、百済・新羅・高句麗・任那と倭国との関係など。更には、系図の作為(偽装)の問題、また、応神・仁徳・履中・允恭の各天皇の同時生存の問題等解決すべき課題は、山積みです。『4世紀の紀年論』の研究は、まだまだこれからです。

### 国生み神話の淤能基呂嶋は玄界灘にあった？

淤能基呂太郎

国生み神話の冒頭、伊邪那岐と伊邪那美が天沼矛で海をかき回して造った日本最初の島である淤能基呂嶋は、古来瀬戸内海を中心にその実在が検討されてきた。淤能基呂嶋で伊邪那美が最初に生んだ島が淡路島となっているからだ。しかし、淤能基呂嶋を詠った仁徳天皇御製の詩には、淤能基呂嶋と共にアジマサの島が登場する。アジマサとは熱帯性のヤシ、ピロウのことだ。ピロウは瀬戸内海に自生せず、自生北限は暖流が通る玄界灘沖ノ島。そして玄界灘には、小呂島と能古島(古名、於呂島と能護島)があり、二つ合わせると淤能基呂島となる。しかも、この二島を結ぶ延長線上に多くの祠や社、遺跡などが並び高千穂神社に至る。高千穂では古来春の大祭でオノコロ島神事が行われている。そこで、オノコロ島を小呂島と能古島の合名と考えて、玄界灘が国生み神話の舞台だったと仮定すると、国生み神話で生まれた吉備児島、大島、女島、知訶島、小豆島、両子島(天両屋)の六島が、全て玄界灘の島々と比定できる可能性が高いことに気が付いた。具体的には吉備児島Ⅱ相島、大島Ⅱ宗像大島、女島Ⅱ糸島姫島、知訶島Ⅱ志賀島、小豆島Ⅱ玄界島、両児島(天両屋)Ⅱ糸島二見ヶ浦だ。これらは、それぞれの島に伝わる伝承、祀られている祭神、島に対する(とと思われる)周囲の祭祀の痕跡などから推定することが出来た。つまり国生み神話の原像は、恐らく対馬を故郷とする海神族による、玄界灘島嶼制圧の歴史であると推定できるのだ。もしもそうなら、小呂島と能古島は上古の歴史・神話上、非常に重要な地位だったはずである。特に糸島二見ヶ浦から見える小呂島は重要な祭祀対象だったはずだ。その形は初期型前方後円墳である纏向型前方後円墳を、横から見た形(方Ⅱ円Ⅱ全Ⅱ1Ⅱ2Ⅱ3)と同じなのだ。

### 反時計回り連続説

児玉 眞

過去において『魏志倭人伝』に記される連続する二十一国を全て比定出来た邪馬台国研究者は居ませんでした。研究者達は邪馬台国へ至る道程にはばかり注目し、邪馬台国の位置を比定する説を乱発してきましたが、残念ながらそれ等の邪馬台国論のほぼ全てに矛盾が含まれるわけです。

現在大学研究所等の古代史アカデミーでは『魏志倭人伝』を辻褄が合わず、資料価値の低い文献と決め付けて解説を放棄しており、考古学的観点のみから邪馬台国比定を試みていますが、何時まで経っても決着が付く気配は全く見られません。つまり、この手の問題を解決するには考古学的観点からのアプローチだけでは無理であり、やはり文献学的考察、即ち『魏志倭人伝』の解説がどうしても必要なのだと思います。そんな中、『魏志倭人伝』に出てくる国々に住む所謂地元民である私は『魏志倭人伝』解説中、土地勘が働くおかげか【反時計回り連続説】を考案しました。そして【反時計回り連続説】を使って、女王国以北の連続する二十一国を全て比定することに成功したと考えています。

その結果、私は邪馬台国の位置を含む、当時の倭国の全体像を把握出来たものと自負しています。

【反時計回り連続説】によると『邪馬台国』Ⅱ筑後山門は『蘇奴国』Ⅱ久留米市と『呼邑国』Ⅱ八女市の間にあるはずなのですが、『邪馬台国』は既述なので簡略化にとことん拘る陳寿により省略されてしまったようです。

陳寿がココさえ省略しなければ所謂【邪馬台国論争】は起きることも無かったはずなのですがね。

### 天照神と首露王は同一人物

福島 巖

天照神と首露王は同一人物であり天照神は男性であったこ



とを明らかにした。三国遺事の首露王がAD42年に、199年に崩御したとの内容を検討した。出雲の国を作ったスサノオから5〜6代目の大國主が天照と国譲りの交渉を行ったのは1577年頃と推定できる(倭国大乱発生)。1999年5月1577年であり首露王誕生から自身で国譲り交渉を見届けて亡くなったという神話を正当化するためには1999年まで生かしておく必要があった。逆に言えば首露王

天照の關係の証明になる。  
倭人とは長江沿川に住み着いた稲作を行い神道を奉じた民族。古くは東南アジアに移住し、弥生時代に朝鮮半島と日本にやってきた染色体Y遺伝子O1bを持つ人達。日本人だけが倭人でなく半島にもほぼ同数の倭人が住んでいた。  
倭国は朝鮮半島にあった国。三国志魏志韓伝には「韓」は馬韓、辰韓、弁韓の三種からなっている。王がいるのは韓と倭のみで帯方郡の支配下に入っていた。韓は帯方郡の南で倭国と接していると明記している。

天照の郷里は高靈。韓国最古の地理書『新增東國輿地勝覽』には天照の親は地元伽倻山の神である正見母主と天神『夷毗訶之』であった。兄はスサノオで大加羅の始祖、弟(首露王)が金官国の始祖であるとしている。中国の後漢ができる混乱期に朝鮮半島に天神は脱出して漢江から洛東江の上流にたどり着き下流の高靈に定着することができた。

首露王はAD42年、朝鮮半島最南端の大河「洛東江」が海に出る金海の地にやってきて仲間の5人の將軍と降臨した。先住者と話し合いにより伽耶国を作ることができた。

AD48年にはインドのアユタ国王の娘16歳の許黄玉が首露王の王妃になるためやってきた。首露王は金官伽耶の王宮を作り伽耶連合諸国の宗家になった。日本の学者で1歩1.5mとしている人を見かけるが天照の陵墓から長さ1歩

23cmであることを発見した。  
高靈にある卑弥呼の墓は117歩で直径27mであり巨大

な前方後円墳を想定することは誤りである。

邪馬台国と女王卑弥呼を尋ねて

大下 巖

- 一. 出発前夜
- 二. 帯方郡を出発
- 三. 倭国本土末盧国へ
- 四. 目前に邪馬台国
- 五. 偵察別動隊は何処へ
- 六. 二度三度の邪馬台国へ
- 七. 周辺の小国と道程一覧表
- 八. 女王卑弥呼の死
- 九. 狗奴国との争乱原因は
- 十. 邪馬台国はやはり北部九州
- 十一. 余里についての検証
- 十二. 倭人伝を考察

\*目次だけを紹介させていただきました。(事務局)

特別企画

―応援しよう! 熊本地震の被災地その2―

会報3号で、宝賀顧問から「阿蘇山と狗奴国地域圏」の投稿をいただきました。今回は、島津顧問から熊本地震の震源地に近い熊本県上益城郡の「二子塚遺跡」を中心とした「私の年代論」の投稿をいただきました。長文ですが全文を掲載しました。

私の年代論

―九州の邪馬台国時代の土器型式―

1 邪馬台国時代

元九州考古学会会長 島津 義昭

邪馬台国時代(史料にその名が現れる時代)は、考古学年代でどのようになるか。従来は、この時代は弥生時代と漠然と考えられてきた。周知のことであるが220年に後漢が滅び、魏・呉・蜀が並ぶ三国時代を迎えた。三国時代の歴史書「三国志」の「魏書」の東夷伝倭人条によると、倭国では2世紀の終わり頃に大きな争乱が起こり、なかなかおさまらなかったが、諸国が邪馬台国の卑弥呼を立てたところ収まった。卑弥呼は239年魏の皇帝に使いを送り「親魏倭王」と金印、銅鏡などを拝受した。245年頃、卑弥呼は没死、志与が継ぐ。266年魏から晋の都、洛陽に倭の女王が使いを送る。邪馬台国時代は3世紀から3世紀後半の、およそ50年弱の期間とみることができる。

弥生時代から古墳時代の転換は、3世紀までが弥生時代、4世紀から古墳時代とみられていたが、古墳時代の指標となる「古墳」の築造が卑弥呼の「冢」と想定された大和盆地のある「前方後円墳」に相当するのではないかと、との説がその周辺の発掘が進むに伴い声高に唱えられるに至っている。考古学で史料での出来事とすり合わせする武器は、編年である。とりわけ多量で普遍性をもつ土器が資料としては優れている。すなわち土器編年が時間尺度の武器である。考古学資料の一例として熊本県内の遺跡を取り上げたい。

2 熊本の弥生時代

最古の弥生遺跡は、平野部に見られる。ラグーンを抱く海岸微高地や扇状地の先端がその生活地である。この点、北九州玄界灘の初期の遺跡と軌をいつにする。中期には台地及び高冷地に集落が営まれる。後期には、阿蘇カルデラの内、肥後台地上に大規模な遺跡が展開し、主要な遺跡は環壕や条溝を持つ。菊池川や白川を望む台地上に遺跡はある。島嶼域の天草では、海岸砂丘や小平野に遺跡がある。環壕集落は、概ね弥生後期に始まり、古墳時代まで続く遺跡もある。ここでは、

環壕集落を全掘した遺跡を紹介し土器の編年を見てみよう。

3 二子塚遺跡

熊本県上益城郡嘉島町二子塚にある遺跡で、九州の中心地域の西側にあたる。遺跡は阿蘇山の西麓から続く低い台地、中央部で標高47.5mをはかる。伏流水は豊富であり台地裾には至る所、自噴池がある。この好立地を利用して当地に大規模な麦酒工場が造成されることになり、造成前に発掘調査を実施した。1988年から1990年にかけて二次の調査で35500㎡が調査され、縄文時代遺物・遺構、弥生時代中期の甕棺墓、弥生後期の集落跡、古墳、平安時代の掘立柱建物、柵列跡が検出された。遺跡の示す情報は膨大で、考古学界で十分に検討されていないように思う。遺跡の中心をなす弥生時代後期の集落跡から出土した土器を紹介し表題の問題について考えてみたい。二子塚遺跡の弥生時代の遺構は以下のとおりである。竪穴住居跡267カ所、環濠一条、復元可能な土器1300点、破片はコンテナ250箱以上。大



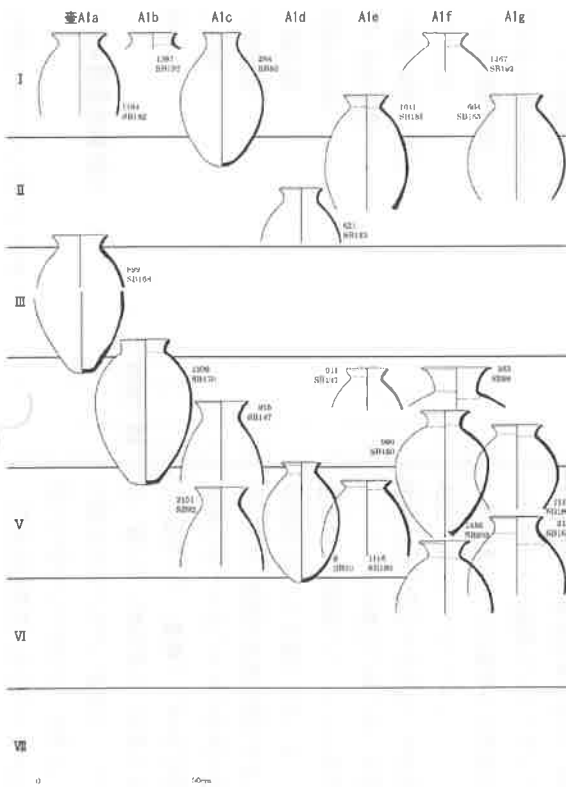
Futagotuka

部分の竪穴から土器は出土した。土器から時期の判定が可能。竪穴は150カ所で半数を超えている。この中には3カ所の鉄製鋤場とみられる竪穴もあった。遺構からは土器と青銅鏡、石器が出土した。遺構の重複の前後関係や土器の形式学的分析から、この集落は7段階(時期)に分けることができる。

4 出土土器の編年

土器形式は多岐である。用途形態から見ると煮沸形態の甕、供養形態の高坏・鉢、貯蔵形態の壺(大甕)にわかれ。壺・甕・高坏の順に編年を示めす。

(1) 壺形土器 土器の容量(大きさ)でABCの3種に分かれる。Aは高さ40cmの大型壺のA1からA5の5種に分ける。Bは高さ30cm前後のもの。Cは高さ25cm前後のものでC1からC3の3種に細分できる。合口口縁や、頸の長い長頸壺、壺形土器の型式、に分けられ、またコップ形をなすものがある。



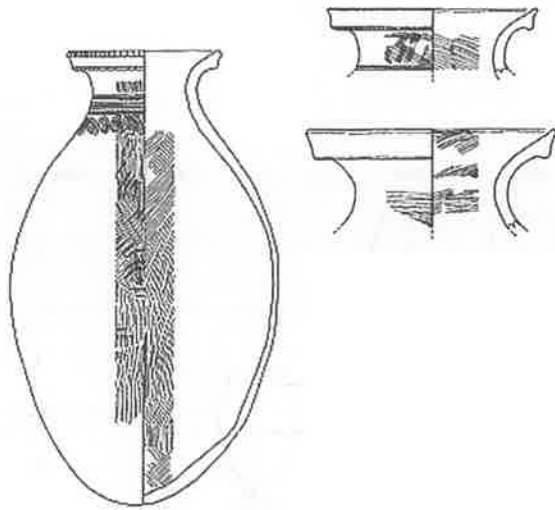
土器の容積を見るとCを基準とした場合Bは3.4倍、Aは8倍で約23リッターとなる。壺形土器が個人に属する容器でないことが推定される。A類は器高40cmの大形である。A1類は長卵形の胴部と少し開く口縁部をもち、変異は少ない。A2a・A2b・A2c類はA1類の口縁部を内側に曲げ袋状口縁としている。

A3・A4類は口縁部を肥厚させ端部に刻目をもつもの、頸部や胴部の上面に楕形の波状紋をもつものもある。この類はさらに胴部が伸びる。

A2類は口縁がやや内側に傾くもので胴部の最大径が上にあるもの、真ん中にあるもの、下方にあるものに分けることができる。

A3類は口縁部が外反し、口唇部に刻目をもつもの。A4類は同じくは口唇部を肥厚させ、断面形が三角形をなすものがある。またこの類には口唇部に刻目をもち、頸部に楕円波状紋を施している。

図291 二子塚遺跡出土弥生土器編年表(要)



A3類の壺形土器 (白川水系壺型土器)

C4類は算盤玉状の胸部をもち、長い頸部をもつもので櫛  
 描紋をもつものや、頸部や肩部の突帯を巡らすものもある。

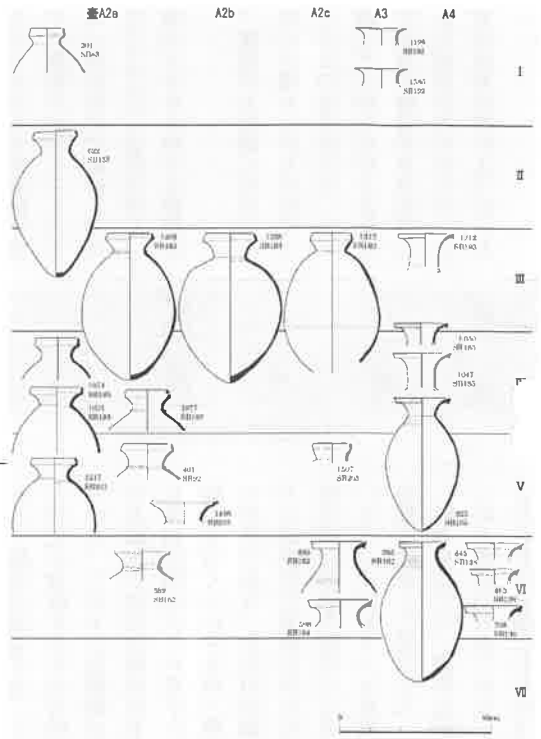


図 292 二子塚遺跡出土土器編年図(右)

353

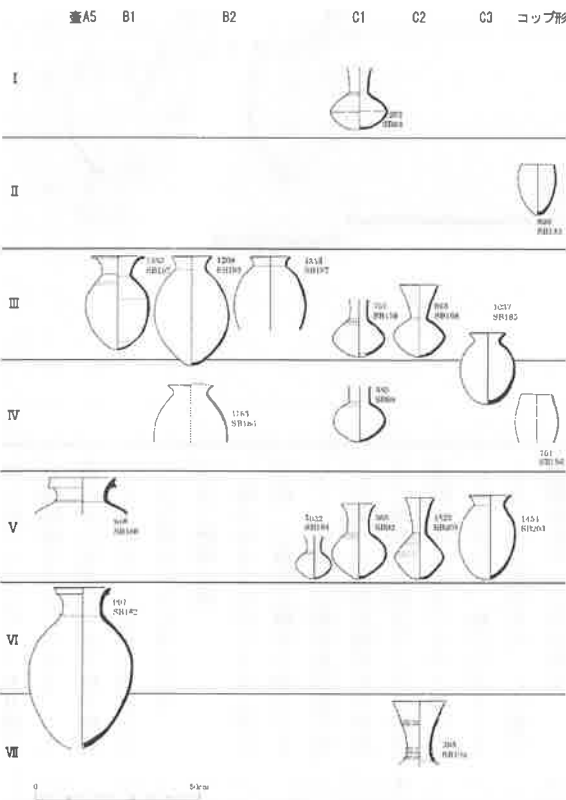


図 293 二子塚遺跡出土土器編年図(左, コップ形土器)

354

二子塚遺跡出土壺A・B・C類

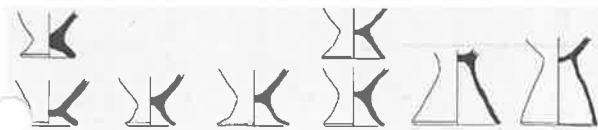
この突帯を巡らす長頸土器は極めて丁寧に作られている。こ  
 の種の土器には研磨され、黒色をなすものがある。長頸の免

田式もこの類に該当する。特異な壺、A3類は口唇部が肥厚  
 し刻目をもち胸部は他の類より長くなる。

この類には肩の上部に櫛目紋が施されている。この土器は  
 武末純一により注目され「肥後型壺」とよばれた。氏も指摘  
 しているが、肥後(熊本県)の北部と南部には分布しない。  
 分布するのは肥後の中央部を流れる白川の流域である。「白  
 川流域壺型土器」と呼ぶのがより適切であろう。なお、「白  
 川流域壺型土器」の分布を詳細に記すと、白川の上流域をなす阿  
 蘇谷の遺跡をはじめ、阿蘇谷の南部地区の南郷谷、白川の中  
 下流域に分布するほか、阿蘇外輪山の南斜面、天草上島まで  
 分布するが、菊池川流域の遺跡からは出土しない。わずかに  
 菊池川の支流・合志川に面する遺跡で出土しているのみであ  
 る。この土器の系譜を考える上で、阿蘇から西に流れる白川  
 と反対に大分県大野川流域に多く分布する「安国寺式」の壺  
 形土器との関連がみられる。その接点に近い阿蘇谷の遺跡で  
 は両者が共存する例がある。また土器表面の調整法も変化す

る。甕B1をみると土器表面の調整法に違いがみられる。全面にハケ調整がみられるものに、そのうえからナデを施す土器をへて、タタキ調整がおおくみられるようになる。V I期以降には胴部上半はハケメ、下半にはタタキの土器が出現し、V II期には全面のタタキを残す土器がみられる。

甕形土器は、器壁が大変薄く内面のケズリはみられないが優れた作りである。特に脚部と上の甕部の造り方には、ひとつの塊を切り離さず脚台を作る方法と脚台は別に作り両者を接合する方法があることが古くから指定されていたが、二子塚遺跡の甕Bは後者が多いようにみられる。

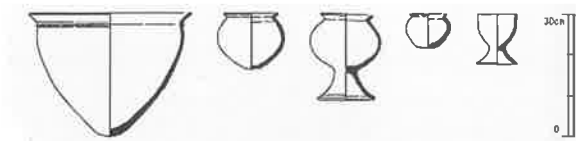


二子塚遺跡甕B類底部分類図

(2) 甕形土器

甕形土器には脚台が付くのが特徴である。脚台が発達する。これは、形式の変化に対応するもので時間差を表している。このような脚部の変化に対応する胴部の変化は特段に見られないが口縁部の断面形には差がある。甕形土器に台付くのは中九州・南九州の後期の特徴であり、北九州の城ノ越式以来の土器製作の特徴とみられ中九州では弥生時代中期黒髪式にも受けつがれている。二子塚V I・V II期の姿はそれが最も発達した姿である。

熊本地域では、甕形土器に脚台が付くのが地域的特徴である。断面の形はAからFの6種にわかれる。脚台が発

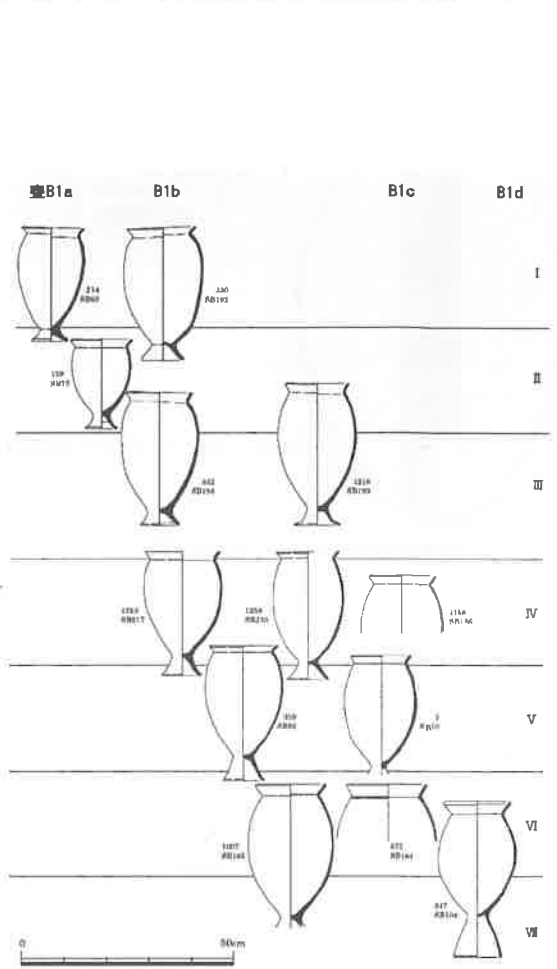


二子塚鉢分類図

(4) 高坏形土器

高坏は8種に分類できる。高坏Aは持ち深い杯部をもつもの。高坏Bも同様であるが杯の屈曲部から先がさらに長くなる。高坏Cはさらに屈曲部から先が延びる。高坏Dはそれが水平に近くなる。高坏Eは杯部が浅いもの。高坏Fは杯の屈曲部が直角に立ち上がるもの。高坏Gは、杯の屈曲部から内側に立ち上がるものである。杯部の形にも差がありAからDのように深いものや、EからGのように浅いものがある。以上の各種があり時期的に異なる変遷を示す。大きく開く特徴的な高坏C類は、遅れて出現する。

土器ではないが、土製品として算盤形の投弾があった。紡錘車は直径6.5cm、厚さ1.5cm、鐔形土製品は下部を失っているが上部に穴をもつ。紋様等は見られないがその外に土器の表面に線描きした土器があった。小型の手捏土器や、小壺に三角紋をいれたもの、コップ形に三角紋がみられるものがある。小形の重弧紋土器は免田式を模倣したものである。

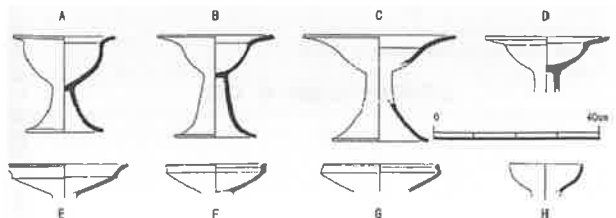


二子塚遺跡甕B類

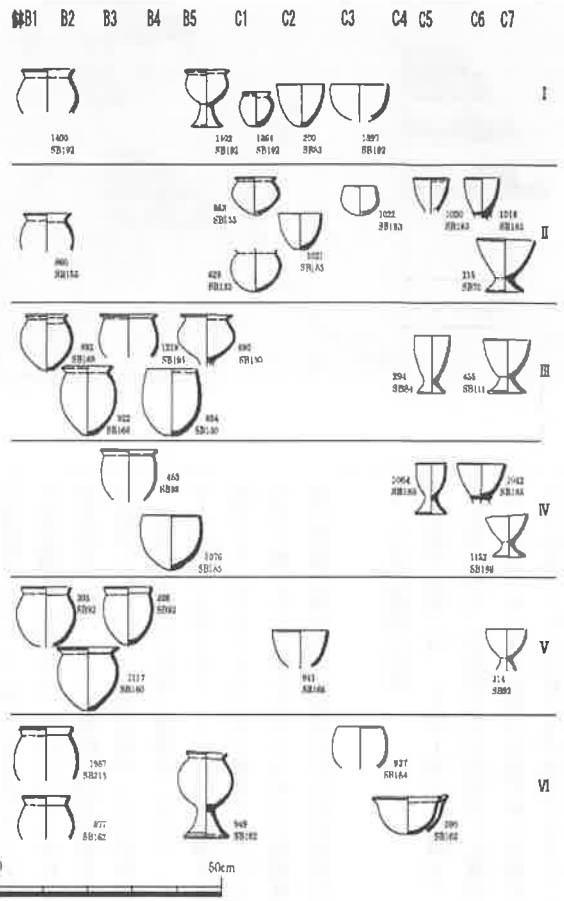
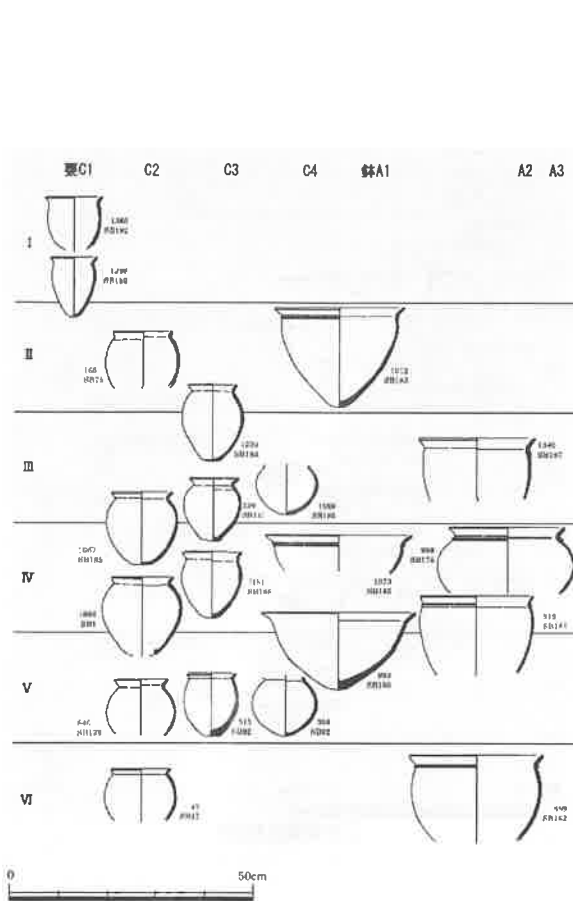
達し高くなってV I・V II期には脚部高4分1にもなる。この類は白川流域の熊本平野で顕著にみられる。この期を最後として台付甕は作られなくなる。

(3) 鉢形土器

鉢Aは25cmから30cmの大型鉢、口縁部の傾きで細分できる。この類には頸の屈曲部に刻目の入った凸帯を施すものがある。鉢Bはおおよそ15cmの中型鉢で脚台もつものを持たないものがある。鉢Cはおおよそ10cmの小型のもの。この類にも脚台をもつものがある。



二子塚高坏分類図



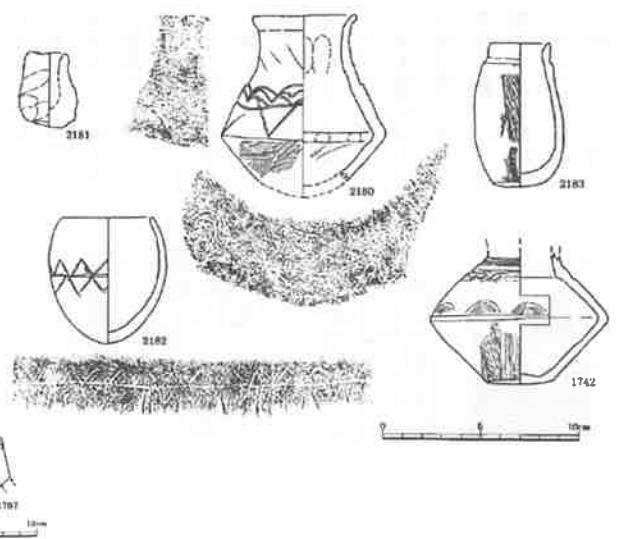
二子塚出土甕C・鉢A

高さも幅も10cm内のミニチュア土器である。稚拙な紋様が刻まれている。

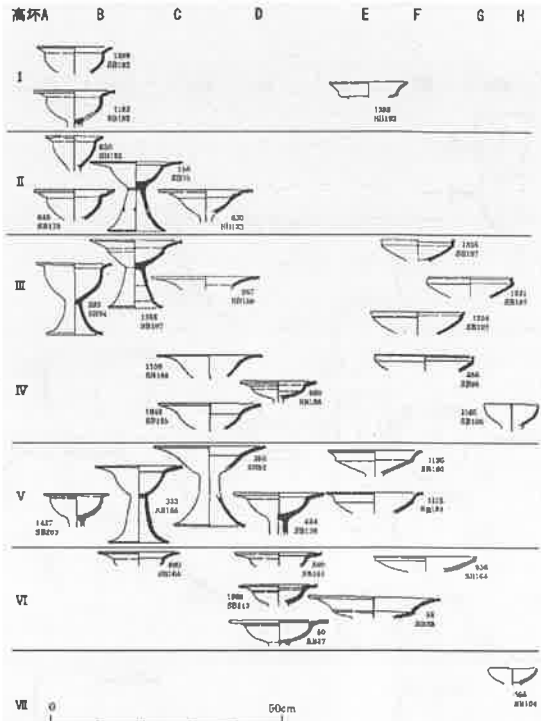
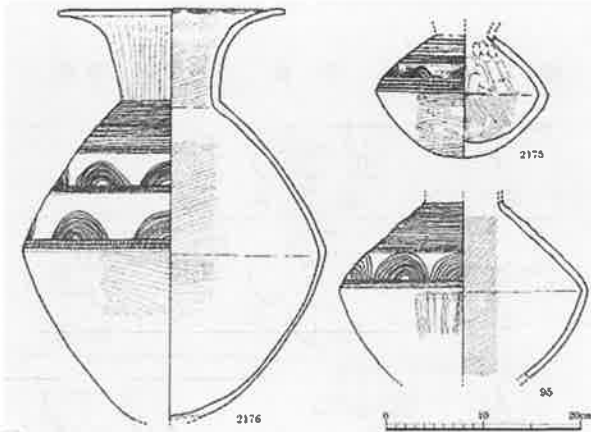
(5) 免田式土器・ジョッキ形土器

屈曲した胴部と長頸の組み合わせが独特の形式の土器である。1918年に熊本県南部、球磨郡あさぎり町(旧・免田村)下乙本目の開田工事で大量の土器が出土したのを契機に免田式土器として広く知られている。

この土器は胴部に一本ずつ描いた重弧紋が特徴ある土器である。熊本地方を中心に福岡県の南部、鹿児島、佐賀、宮崎で出土している。特徴的な型式であり、紋様には数種の規則あるパターンがみられる。「免田式」の提唱者、乙益重隆は胴部が大きく屈曲する免田I式と、胴部



二子塚遺跡紡錘車・鐸形土製品



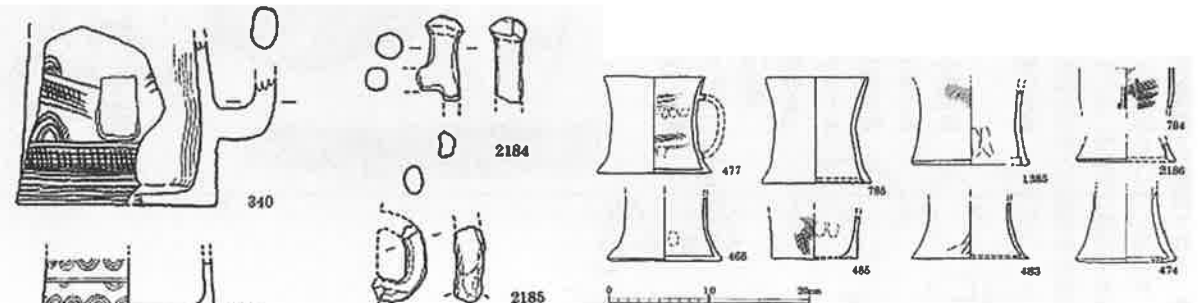
二子塚遺跡高坏A

5 二子塚遺跡の時期  
土器の分類では、二子塚I期からVI期までに変遷をたどることが出来た。弥生時代のどの時期に位置付けることができるであろうか。弥生土器はI様式からV様式までの5期にわける。これは土器の型式変化だけでなく、文化の、も

は丸みをもつ免田II式があると2式に分類している。後者には重弧紋の代わりに三角紋がみられる。この土器には「ジョッキ形土器」と呼ばれる、現代のジョッキにも似た土器が伴う事も知れていた。二子塚遺跡では完形品を加えて1159点が出土した。ジョッキ形土器は108点出土した。  
胴部に免田式の紋様(重弧紋)をもち、取手の先端が肥厚する異例の土器も出土した。免田式土器は土抗墓の副葬品や埋没した住居跡の上などから発見されていた。特別な祭祀の為の土器であるとみられていたが二子塚遺跡では住居跡から他の種類土器とともに発見されたのが注目される。

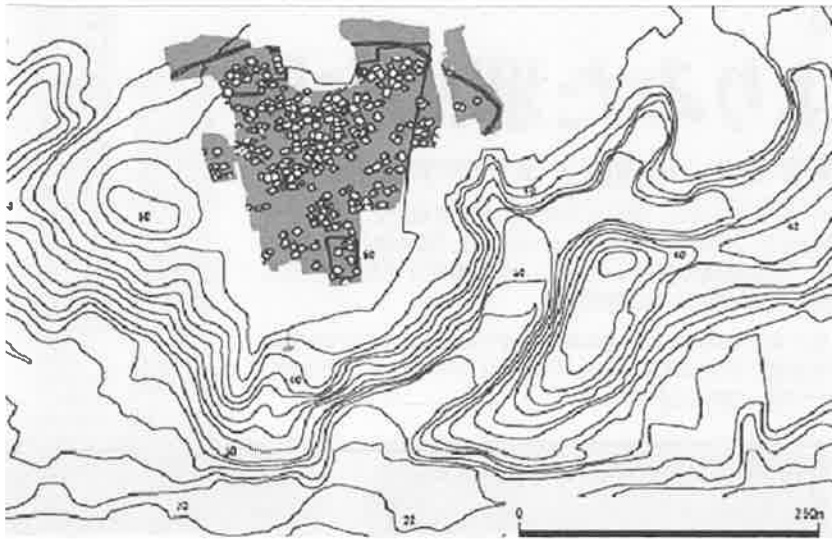
九州地方の弥生土器編年の研究では、弥生文化研究の先駆地である北九州の土器編年との平行関係をみいだす方法で、中九州・東九州・南九州の編年が組み立てられてきた。1969年「弥生式土器集成(本編下)」で乙益重隆は、北九州の第I様式から第V様式に平行する中九州の土器を次のように細分した。

第I様式はA板付式土器、B立屋敷式土器、C下伊田式、第II様式は北九州の城ノ越式に相当する土器、



二子塚出土ジョッキ形土器

第Ⅲ様式は北九州の第Ⅲ様式である須玖式そのもの、式は4種の土器形式が時間的・地域的に混在して1時期を構成しているとして、A黒髪式、B伊佐座式、C兔田式、D櫛描文系土器と分類した。Aは熊本県の北の地区に散発的にある。第Ⅴ様式は野辺田式で熊本県全域に分布する。以上の分類の上に二子塚遺跡の土器を位置付ければ、中九州第Ⅴ様式に相当する。その標式遺跡である玉名市野辺田遺跡の土器に相当するといえる。野辺田式は北九州の西新式と対応することのできる型式である。近年、この期の土器の細分が進み、諸案



二子塚遺跡の全体図

が発表されている。

実年代については、岡崎敬の中国鏡と共伴した弥生時代遺物から年代を決定していく方法が支持される。それによれば第Ⅴ様式の終末から土師器に続く、狐塚遺跡の狐塚Ⅰ式・Ⅱ式は2世紀後半から3世紀前半にあてることが可能であるとしている。従って二子塚の土器群もこの時期であろう。乙益重隆によれば、野辺田式は土師器の時代も含むとしている。しかし二子塚遺跡には土師器とする土器はない。恐らく、二子塚の弥生土器は後期後半から終末期にかけての所産であろう。野辺田式が乙益重隆の判断のように土師器を含むとするなら、二子塚の土器は、それ以前の時期、すなわち野辺田式の前半であろう。広域的な時間軸の指標となる畿内第Ⅵ様式から抽出された庄内式は、熊本県の北部地区の最大の拠点遺跡である山鹿市方保田東原遺跡からは出土しているが、その他の地域、とりわけ熊本平野での出土の有無は不明で、その確認は今後の課題である。

### 6 二子塚弥生集落と邪馬台国

二子塚遺跡は全体図でもみられるように、台地の平坦部に位置する弥生時代後期の集落跡である。北はなだらかに低くなり、南は比高差25mの急崖をなしている。北側に幅2.5mから3m、深さ2mの溝をもつ。環濠の延長は250mに及ぶ。2カ所に入入口(陸橋部)もつが、この部分が溝が掘り残してあった。東側の入口は幅3mで、橋から集落内に続く空白帯があり、道とみられる。二子塚遺跡の範囲は東西280m、南北280mとなっているが、以前に削平された個所や未調査部を勘案すれば東西南北300mとなる。集落居住域)の面積は5ha弱となる。集落内は道により二分されている。両者の関連は今後の課題である。多くの竪穴の規模は近似であり、集落内の階層分化がゆるやかであったことがわかる。共同使用の用途を想定できる大型竪穴もあった。また

集落内で鍛冶が行われていたが、その様相は、「初期鉄器」文化でなく「原始鉄器」文化であるという村上恭通の指摘を支持したい。石器で鉄器を作る時代であった。

当時、北九州には共同体内の階層差が遺構・遺物の格差として現れる巨大環濠集落も出現していて邪馬台国の国に比定されてもいる。二子塚遺跡も同時期の集落であるが、階層差の稀薄な「原始共同体」で、均一性の強い集落であった。

最後に、二子塚遺跡の調査を共に行った諸氏、とりわけ鍛冶遺構の調査、遺物の整理と報告書執筆に力を尽くした村上恭通愛媛大学教授、宮崎敬士熊本県文化課参事、愛媛大学考古学研究室のみなさんに謝意を表す。

「これは「東亜細亜歴史文化論叢」(2014年 529頁)に発表の論文を再構成したものである」

## 編集局だより

事務局長 菊池 秀夫

今回も多くの顧問の先生から投稿をいただきました。御礼申し上げます。

さて、前回のクイズ「邪馬台国の碑」はどこか、の回答を発表します。「邪馬台国の碑」は、山梨県富士吉田市にあります。



| 講演 1 | 13:30~15:00

# 『三国志』よりみた邪馬台国

南至邪馬台国  
女王之所都



渡邊 義浩 先生 (早稲田大学文学学術院教授)

一九六二年、東京都生まれ。筑波大学大学院博士課程歴史・人類学研究科史学専攻修了。文学博士。『三国志』(中公新書)、『魏志倭人伝を読む』(中公新書)、『三国政権の構造と「名士」』(汲古書院)、『三国志』よりみた邪馬台国』(汲古書院)など著作多数。

『魏志倭人伝』は、日本のために書かれた記録ではなく、あくまでも曹魏そして西晋を正統とするために書かれた『三国志』の一部です。『三国志』の全体の中で邪馬台国を位置づけます。

全国邪馬台国連絡協議会

## 「第2回東京地区講演会」開催!

7月15日(土) 13:30スタート  
[13:10受付開始]

\*当日受付(先着順/定員100名) ※定員に達し次第締め切る場合がございます。ご了承ください。

参加費  
一般 1,500円  
会員 1,000円

\*当日のご入会も歓迎いたします。

会場

豊島区生活産業プラザ  
三階大会議室

JR、東京メトロ(丸の内線、有楽町線、副都心線)、  
西武線、東上線、都バス、民営バス  
<各線池袋東口下車徒歩7分>



| 講演 2 | 15:20~16:20

## 魏志倭人伝の「水行二十日」 「水行十日、陸行一月」の解釈

加茂田 義文 氏



会社を定年後、「全国邪馬台国連絡協議会」をはじめ「九州の歴史と文化を楽しむ会」「先古代史の会」「神奈川徐福研究会」等に参加。  
現在69歳。

魏志倭人伝に書かれた行程を正しく理解すると、邪馬台国は、自然と日向に至ります(邪馬台国日向説)。また、日本書紀の景行紀中に天皇が、日向で読んだ歌の中に「夜摩苔(ヤマタイ)」と原文表記がされています。更に、その他の多数の傍証を紹介いたします。

講演 2 の終了後、質疑応答の時間を設けています

全国邪馬台国連絡協議会

詳細は <http://zenyamaren.org/>

水行二十日  
水行十日  
陸行一月